

幼女、麦わら海賊団と
共に行く

犬吾郎

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

麦わら海賊団が訪れたとある島。

そこに居たのはデカイ犬（狼）☒と思ったら何と幼女に大変身！

幼女よ！海賊団の一員となって、大海原を駆け巡れ！

目次

設定

オリジナル登場人物

本章

狼幼女

幼女、保護される

幼女、群れ（仲間）に加わる

幼女、山を越える

幼女、クジラとお爺さんに出会う

36

幼女、母親を知る

幼女、最初の島へ行く

幼女、歓迎の島に降り立つ

1

102

幼女、リトルガーデンに辿り着く

92

幼女、王女を群れ（仲間）に迎える

幼女、島から脱出する

76

31

22

14

4

45

55

67

設定

オリジナル登場人物

ヴァル 恐らく8歳前後

身長120cm

動物系 ゾオン イヌイヌの実 (???)

出生地、誕生日不明

イメージ国 ドイツ

詳細説明

風の帯の海域にある無人島で暮らしていた。島の名前は無い為、近くのローグタウン等 カームベルトに住む地元島民からは通称「処刑島」と呼ばれ恐れられる。東の海では考えられない程 イーストブルー凶暴な生物が生息し、海兵は勿論、海賊さえも近付くことは死を意味するとしてどんなに航海が行き詰まろうとも島に上陸しようとはしない。(上陸する前に海王類の餌になる)

ヴァルは凶暴な生物達を圧倒する力を保持し、島の生態系の頂点に立っていた。偶々島に訪れた(訪れることの出来た)麦わら海賊団と出会い、信頼関係を築き(懐いて)一

味に加わる。

群れ（仲間）のリーダーであるルフィと、お風呂で綺麗にしてくれたり言葉の単語など色んな事を教えてくれるナミに良く懐いている。

ゾロとよくお昼寝している。

（サンジは良く美味しい料理を沢山作ってくれるが時折バカになる為、島に居た発情期の猿に似ていると密かに思っている）

野生で生活をしていたことが原因で言葉を話せないが意思疎通は最低限可能。いつ話せるようになるかは不明。

感情があまり表に出ず無表情。

首には自分の名前が書いてあるドッグタグを身に付けている。

瞳は青と緑の中間色であるエメラルドグリーンに、髪色は銀色で水や光で輝く光沢を持ち、顔立ちは成長すれば必ず絶世の美女と呼ばれるであろう整った顔をしている。外見は母親譲り。

長い年月で髪が伸びきってボサボサだった為、ナミがウルフカットに切って整えた。

狼の姿に変化出来る上、狼の体を自在に大きくさせられる力を持っている。動物系ゾオンイヌイヌの実と思われるが未だ謎に包まれている。

悪魔の実で狼になる為か、群れ（仲間）に対する仲間意識が強く、仲間には心優しい

が、敵に対しては真逆で危害を与えて来たと判断すれば容赦がカケラも存在しない。

母親は元ロジャー海賊団でクルーをしていた。父親は不明だが、クロツカスに言わせると目や雰囲気は似ているらしい。

ヴァルの力量

地面を強く蹴って高速で相手の懐に飛び込む俊敏性。

普段はフワフワでサラサラな自分の体毛などに力を入れるように意識をすると、銃弾や刃物も通らない頑丈さを出す柔軟性。

遠く離れた所からも嗅覚や聴覚または気配で危険を把握する索敵能力。

体を巨大化する事で相手を瞬時に圧倒する制圧力。

何でも噛み砕く強靱な牙。

硬いものを噛んでも負けない咬合力。

本章

狼幼女

寝ていて固まった体を伸ばすとと首にあるシヤラシヤラが揺れた。外から入ってくる日光から良い天気だとわかる。昨日は何も食べてないから今日が絶好の狩り日と思わず嬉しくなる。巣から飛び出ると崖を駆け降りて川に着いた。草陰に隠れて水を飲みに来る獲物を待つ。太陽が真上に来る頃になって川に若いオスの猪が現れた。気づかれぬようにゆつくりと、ジリジリ猪の背後に回り込む。

タイムリングを見計らって勢い良く草陰から飛び出した。猪は驚いて逃げ出す。でも行き先には大きな岩が立ち塞がっている。猪は岩に気付いて止まろうとするが勢い良く走っているので中々止まらない。慌てている猪の隙に追いついて首に噛み付いて体重をかけて押し倒した。猪は暴れたが噛み付いている方が大きいため抜け出せない。噛み付いたまま力を込めて猪を仕留めた。

おおー！島だ——！！

何かが聞こえた。聞いたことの無い鳴き声だ。仕留めた猪を啜えて急いで巣に戻る。猪を巣に置いてると、段々鳴き声が近づいてくるのがわかった。

「ヤロー共！錨を降ろせー！上陸するぞっー♪」

麦わら帽子を被った少年モンキー・D・ルフィが船首に立つて両腕を広げている。島を見つけて喜んでいた。その姿を見て誰かが声をかける。

「アンタも手伝いなさいよー！人だと時間が掛かるでしょうがー！」

ルフィが何もしていないのを見てオレンジ色の髪をした女性ナミが怒った。

「ルフィ！ナミさんの手を煩わせんなー！」

「ありがとうサンジ君。錨早くしてね」

「っはーい！ナミいすわあぁん♡」

目を♡マークにした金髪に特徴的なグルグルの眉毛をした男性サンジが嬉しそうに体をくねらせていた。

「こんな変な所に島があるとはなあ…」

長い鼻をしてパチンコを持った少年ウソップが不思議なものを見るように島を眺めた。

「どつちにしろ、食糧が尽き掛けてたんだ。運が良かったな」

「全く、お前達が飯いっぱい食うからだぞ」

「「お前が言うな!!」」

ゴン!

「痛って——!!!」

緑色の短髪に腰に三本の刀を持った男性ロロナ・ゾロがルフィの頭を殴った。殴られたルフィは頭に大きなタンコブを作っている。

この集団の正体は、最近結成したばかりのルーキー麦わら海賊団。船長のルフィを始め、航海士のナミ、海上コックのサンジ、狙撃手のウソップ、戦闘員のゾロと5名で成り立っている。

ルフィが船に備蓄していた食糧を食い漁り底をついてしまった為、島で食糧を補給しようと考えていた。

船の碇を下ろして海岸付近に停泊させてから上陸する。島は思っていたよりも自然に囲まれていて人の住んでいるような気配は無かった。どうやら無人島らしい。

「何かスゲー生い茂ってるな。人が見当たらねえ」

「冒険するぞー!!」

「いや待てルフィ! まずは食糧だろ」

上陸してからナミが各自の役割を決め始めた。

「サンジ君とゾロはそれぞれ食糧を探して来て。私とウソップは船の近くに残って辺りの搜索。ルフィは…危険な生き物がいたら私達を守る担当ね」

「何でコイツと…」

「文句を言うな！ナミさんからの直々のお願いだろうがこのクソマリモ！」

「何か言ったかグルグル眉毛？」

「あ、あ、!?？」

バゴッ！

「喧嘩するな！」

喧嘩をし始めた2人を見てナミが拳骨で殴り鎮める。一味は何時も通り、喧しく冒険を始めた。

草むらに隠れて様子を見ると、不思議なものに乗ってやって来た生き物達があった。体も小さくて群れを作っていた。オスが4匹とメスが1匹。やっぱ聞いたことのない鳴き声で群れの仲間達と意思疎通をしている。知能が高い生き物なのかな？今のところ危険は感じないが、もう少しだけ様子を見よう。ケンカしてた2匹と3匹は別れて森の中に入って行く。…3匹の後を追ってみるか

「あーミヤマだ！ミヤマクワガタがいるぞ！」

「何い☒どこだルフイ！」

「うるっさいわよアンタ達！変なのが来ちやうでしょ！」

一体この生き物達は何なんだ？あの姿に似ているけど鳴き声は違う。虫が好物かと思ったらメスが吠えてるから違う。見てると余計に分からない。…まずい、嗅ぎたくなってきた。

「それにしても…この森なんだか気味が悪いわね。いつか怪物とかオバケとか出て来そう…」

スンスン…

「おおお、おいナミ！お、お化けなんているわけねーだろ！ももも、もしいたら俺は！逃げる！」

スンスン…

「面白れーの来ねーかな？」

「楽しんですんな！」

スンスン…

「…なあ、さつきからこの、スンスン…てのは何だ？」

スンスン…

「怖いこと言わないでよ!!」

スンスン…

「犬がナミを嗅いでるからだろ。ほら後ろ」

「え？」

スンスン…

やつぱり初めて嗅ぐ匂いだ。でも、不思議と嫌な感じはしない。あ、バレた。なんか目が飛び出して見える。

「な、な、なななな…！でで、出た——！！」

「ぎゃ——！！！」

「デツケー犬だなあ〜」

「ち、ちよつとルファイ！気付いてたなら早く言いなさいよ！」

「お、おとお、おい！早く何とかしてくれ！食べられるぞ！」

【叫んだ2匹がオスの後ろに隠れた。壁にされたオスは怖がらず立っている。見た限り群れのリーダーだな】

「何で人がいねえのに犬が居るんだ？普通犬がいるなら人いるだろ」

「お前はバカかあ！どつから見ても狼だろうが——！」

「しかも、何でこんなに大きい訳☒狼って犬よりちよつとだけ大きいだけでしょ！」

【嗅いでよかった。この生き物達は色んな音を合わせて使って鳴き声として出してい

る。知能が高い予想は当たっていた。この島にいるサル達よりもかなり知能が上だと
思う」

「まあ任せろ。何とかする」

「よし行けルファイ！後は任せた！」

【リーダーのオスが近付いてきた。敵意は…感じない】

「おい犬、お手！」

「何しとんじやお前は——！！」

【なんで前足を出した？…まあ匂いでも嗅いどくか】

スンスン…

「…いや、匂いを嗅げって意味じゃねえぞ？」

「ルファイ！いいから手を引っ込めろー！」

「食べられるって言うてるでしょ！」

【顔が不満そうになった。出した前足にもう一方の前足を重ねて何か言ってる。何がしたいんだ？まさか、前足を乗せろって言いたいのか☒大丈夫なの？本当に？潰れないならいいんだけど】

ポンッ

「「お、おとおお………お手した」」

「潰れてないな。良かった。ん？怯えてた2匹がちよつとずつ近づいて来る」

「な？何とかなつたら？」

「いや、普通は無理だ」

「と言うより何でお手したのよこの狼……。あれ？この子首に何かかけてる」

「メスがシヤラシヤラに気づいた。これが欲しいのかと思つたがそうではなく、シヤラシヤラを眺めている。欲しくてもあげないぞ」

「これドッグタグよ、しかも何か書いてある」

「ドッグ？やっぱ犬なのかコイツ？」

「ドッグタグつてのは、ネックレスの一種。元は軍人の認識票でよく自分の名前とか書いてあつて……。書いてあるー！」

「えつと：ヴァルつて書いてあるな。これ名前か？」

「多分この子の名前だと思う」

「へー、バルつて言うのか」

「「バ」じゃなくて「ヴァ」よ」

「3匹がシヤラシヤラと顔を見比べている」

「お前ヴァルか？」

「リーダーのオスに鳴き声をかけられた。ヴァル、生まれて初めて聴いたその鳴き声に

どこか懐かしい響きを感じる」

「ワフ」

「おお！返事した」

【返事をするときリーダーのオスは嬉しそうにした。先程まで怯えてた2匹も警戒心が無くなっている。この姿を見た生き物は一目散に逃げだすのだが、警戒心を感じないのは新鮮な感覚だ。やはり危険が無い生き物なのだろう。ふう、よかったよかった】

シユウウウウウウ…

「「え？」」

【元の姿に戻ると、3匹は驚いた顔をした。特に先程叫んでいたメスが慌てた顔をしている】

「能力者だったの☒しかも女の子で全裸！」

「お、おいルフィ！今すぐ後ろ向け！」

「何でだ？」

「良いから俺とあっち行くぞ！虫探しだ！」

「おお！良いぞ！」

「(ウソツプ！ナイス！)」

【オス2匹が後ろを向いて走っていった。残ったメスは困ったような顔をする。そんな

顔をされてもこっちが困るのだが」

「(どうしよう、服は船に積んであるし…後、汚れてるからお風呂に入れないとなあ…)
ああ、こんな時にサンジ君が居てくれたら…!」

ピクピクッ!

「ナミさんが俺を呼んでいる!おいクソマリモ!ナミさん達に合流だあ!」

「いきなり何だよ」

「良いから、来い!!すぐ迷子になるお前を探すのはクソめんどくさいんだよ!」

「喧嘩売ってんのかお前は!!」

幼女、保護される

麦わらの一味は、無人島で偶然出会ったまだ幼い8歳位の幼女ヴァルを保護して海賊船に連れていった。

「メスに抱きかかえられて、先程の不思議なものの所まで連れてこられた。不思議なものからは木の匂いがしてくる。匂いの通りならこの不思議なものは木でできているよ。うだ。メスが水で一杯の場所に連れて来た。無抵抗していると水を頭からかけられて毛に何かを付けてワシヤワシヤして洗ってくる。ワシヤワシヤされると黒い色のした水が出てきた。何回かワシヤワシヤ繰り返すと、段々出てくる水が透明になった。目の前にある水面のようなモノに写った自分が綺麗な銀色をしていて光があたってキラキラと光っている。メスはそれを見て目を輝かせた」

「うわあ！キレーな銀色！凄く光ってる！」

ナミは海賊に入る前はイーストブルーを拠点にして海賊専門の泥棒として財宝を盗んでいた。その為か綺麗な物を見ると目を輝かせる癖を持っている。

「目が凄くキラキラしているのが気になった。メスは自分が見ているのに気が付いて我

に帰った。

洗われるとメスが毛を切ってきた。毛を切った時に使ったモノは鋭い切れ味だったから痛くなかった。毛を綺麗にされてからまた別の場所に連れられた。今、自分はメスの着ているモノを着せられている。体の大きさが違い過ぎる為ブカブカだが何とか着れた。」

「君の為に作ったんだ。食べてくれるかい？」

「？」

ヴァルの顔を見たサンジは思わず固まり目を見開く。ヴァルはエメラルドグリーン色の瞳に銀色の髪、そしてまだ幼いながらも将来は絶世の美女と呼ばれる程に整った顔をしていた。お風呂から上がってタオルで頭を拭いていた時、顔を見たナミも思わず固まってしまった程だ。

「金色のオスが固まったと思ったら表情が崩れた。鼻の下が凄く伸びている。なんだコイツは？」

「なんて素敵な顔立ちなのだろう…まるでここに天使が舞い降りたようだ！」

「ああ、始まった……」

サンジは女好きで仲間達も美人を見た途端アホになるサンジに呆れていた。

サンジがアホになっていると、扉が開いた。ルフィとウソップが虫取りから戻って来たようだ。

「おう、お前ら帰って来たのか。ん？ルフィはどうしたんだ？」

ゾロはルフィのダラーンとした両腕を見て上陸時と違う様子に気づく。ウソップが質問に答えた。

「腹空いたんだってよ」

「んお？あ！飯ー！」

ルフィがヴァルの料理を見つけて飛びかかった。サンジがルフィに向かって足を振りかぶる。

バギツ！

「な、なんへへつはあ…」

「何この子の料理に手え出そうとしてんだ、このクソ野郎！」

「だ、だつてー、もう俺腹が減つて死にそうなんだよ…」

「だからつて食おうとすんな！」

【前から思ったが、鳴き声の中で聴こえるナミやルフィやサンジとかいったものは仲間同士の分け方のようなだ。メスがナミ、金色のオスがサンジ、群れのリーダーのオスがルフィ。なるほど、段々この生き物達の言葉がわかるようになってきた。ルフィが腹を盛

大に鳴らしている。仕方ない。洗ってくれた札でもするか」

「ヴアル？どこに行くの？」

「ヴアルちゃんって言うのかあ…。素敵な名前だあ！」

「アホか」

【外に出ると群れが後に続いてくる。取り敢えずこの着ているモノ邪魔だ】

「えええ！何で脱ぐの☒服嫌だったあ☒」

「う、うおおお！何てハレンチな…でも、その大胆さも素敵だああ!!!」

「お前はちよつと黙ってるこの変態が!!」

【騒がしさを無視して体を変化させる。洗われたからか、いつもより確実に快適になつた】

「な、なんだコイツ☒能力者か！」

「おおう！狼になった。けど綺麗だあ!!」

ヴアルはルフイの着ているモノを引っ張る。

【ほら、さつさとこつち来い】

「何ダア？俺もう腹減って力でねえぞ？」

【フラフラするな。背中に乗せてやるから来い】

「何処かに連れて行きたいの？」

「ワン」

【鳴き声をかけられたから返事をした。群れは不思議そうに首を傾げながら背中に乗ることを決めた。道中険しい山道になる為体をさらに大きくして山を登った。山を登り進めていると住処の洞窟が見えた。目的地に着いたからしやがんで群れの全員を降ろした】

「おお！肉だああ!!」

ルフィが猪を見て走って近づいた。食べられる物を見つけて元気になったらしい。

「もしかして…ルフィがお腹空かせているの見て、食べ物があるよって教えたかったの？」

「ワン！」

【なんとか通じたらしい。何故だか分からないけど、段々と群れの言葉を何となく理解してきた。言いたいことが伝えられず歯痒い気持ちでいたのがスッキリした。メスが頭を撫でる。気持ちがいい】

「ありがとうヴァル」

「クウーン」

「ヴァルちゃん、何ていい子なんだ……！」

一味はヴァルが狩りで得た猪を手に入れてヴァルと共に船に戻った。

ヴァルは船に着いてから料理を食べた。最初は慣れない匂いで口にするのを躊躇したが、一口入れるとあまりの美味しさに我を忘れて没頭した。一味はそんなヴァルを見て頬をニツコリとさせた。一部の者はニツコリでは無くデレーンとだったが……。

夜になって一味はヴァルから貰った猪を食べて腹を満たした。ナミの部屋では、ドツグタグが暗い部屋の中鈍く光っていた。今日だけで色々な経験をして疲れたヴァルが布団を被って寝ている。そんな中、麦わらの一味全員がキッチンに集合して会議を開いていた。会議の内容はヴァルのことだった。

「そんであの子どもどうするんだ？このままって訳にはいかねえしなあ」

「連れてきたのは良いけど、そうよねえ……」

「確かに、あの子はまだ幼い子供だ。でも、海賊が育てる訳には……」

一味がヴァルの扱いに悩んでいる中、ルフィが口を開いた。

「俺、アイツ仲間にした」

「「はああ」」

ルフィの言葉に仲間達が驚愕した。

「いやいや聴いてなかったのか？まだあの子は幼い子供だぞ！」

「あのデツケー猪取つてたぞ？ウソツプよりは強いだろ」

ウソツプは猪の大きさを思い出して、自分では決して捕まえることは不可能だと思つた。

「ああ確かに……つてそうじゃない！」

「そうよルフィ！海賊になるのは良いとして、それであの子に危険が迫つたらどうするのよー！」

ナミはヴァルがもし海賊になつて命を落としたらそのことを考えた。

「それは俺達が守れば良いだろ」

「俺達にそんな余裕があると思つてるか？偉大なる航路グランドラインに行くんだぞ」

サンジの言う通り、麦わら海賊団はこれから偉大なる航路グランドラインに入ろうと計画していた。

その先は、唯一人しか制覇したことのない後半の海「新世界」と呼ばれる場所に行く。数多の海賊達は「新世界」にある最後の島「ラフテル」を目指して争いの中を潜つて行かなければならない。まだ幼いヴァルには荷が重いとサンジは考えた。

ルフィはサンジの顔を見て言つた。

「でも、アイツのこと気に入っただろ？」

「それは勿論だ！うちに入った暁には、命に代えても守り通す!!」

先程までの反論が台無しになった。

そんな中、口を噤んでいたゾロが言い出した。

「まあ、アイツの強さは並みの物じゃねえのは確かだ」

「ゾロ！アンタ何言ってるの！」

「お前らも見ただろ、洞窟があったあの崖の傷。あの傷全部がアイツの爪で出来た物だった」

一味は猪の元まで連れて行って貰った光景を思い出した。ヴァルの住んでいた洞窟付近の山は他の生き物の気配が全く無く、崖にはヴァルの爪で出来たであろう傷がそこら中にあつた。

「あれはアイツがあこの山の主つてことを現してる証拠だ。もしかすると、この島の頂点に立つ者なのかも知れねえ」

「多分そうだろ。あそこ全然他の動物がよりついてなかったからな」

「…で？結局、ルフィはあの子を仲間にするまでここを出ないつもり？」

ルフィは勢いよく頷いた。ナミはそんなルフィを見て首をカクリと落とす。ヴァルを仲間に取り入れるルフィの意思に負けて、降参と言いながら両手を挙げた。

幼女、群れ（仲間）に加わる

「目が覚めると見慣れない場所にいて一瞬驚いたが、すぐに理解した。昨日はナミの寝る場所で寝たのだった。」

ナミは先に起きてペラペラのものに何かしている。真剣な顔をしているナミの顔を見て、邪魔をしてはいけなれないと思ひ静かにナミを眺める。切りのいい所まで仕上がったのかナミが羽を机に置く。視線を感じたナミが見ている自分に気付いた」

「おはようヴァル、良く眠れた？」

「コクツ」

ヴァルは首を上下に動かして肯定した。それを見てナミは笑った。

出会ってから一度もヴァルの笑顔を見たことも、声を聞いたこともないがナミは仕方ない無い事だと考えていた。

ヴァルは物心付かない頃からこの島で生活している為、言葉を使うことも笑ったことも無かった。麦わら海賊団に出会うまで言葉の存在も知らなかった為、話せ無いことも

無理は無い。しかしヴァルは、野生仕込みの頭の回転の速さがあり一味の考えている事を汲み取り態度で言いたい事を伝えていた。ナミにはヴァルが自分達の考えを理解している印象があつた為、いつかは笑つたり話せる時が来ると思った。

ナミは寝ていて乱れたヴァルの髪を解いてあげる。長年の汚れで分からなかつた髪の色がお風呂に入った事で素の色に戻り、キラキラと朝日に輝いていた。ナミは銀色の髪を見ながら顔を緩ませる。朝からキラキラ光る物を見て嬉しくなつた。

「本当にヴァルの髪の毛は綺麗ねー。羨ましいなあ」

「？」

ヴァルは野生児の為、髪についての美意識は無かつた。ただナミの夕陽のようなオレンジの髪は見ていて凄く落ち着く感覚があつてヴァルのお気に入りとなつていた。

ヴァルに服を着せてからナミは手を繋いで部屋を出てキツチンに移動した。サンジが朝ご飯の用意をしてくれていた。

「おはようナミさん、朝ご飯出来て：ヴァルちゅわああん！ナミさんの服また着てるのお？可愛いでちゅね——♡はああい！朝ご飯出来てるから、一杯食べてね？」

「コクツ」

「頷かれるだけでも嬉し過ぎるう!!」

サンジは絶賛ヴァルブームにハマつていた。ナミの服が大きいのと体がまだ小さい

せいか、比護欲が湧き上がって仕方が無い様子。

ヴァルはそんなサンジを不思議そうに見ながら朝ご飯を食べ始めた。サンジの作る料理はどれも美味しい為まだ上手く使えないフォークを右手に持ちながら一心不乱に食を進める。ナミはコーヒーを飲みながら可愛さを堪能していた。

バタンツ！

「サンジー！朝飯超越せー！肉が良い!!」

「肉は昨日お前が全部食っただろ!!」

扉が勢い良く開けられてルファイが入って来た。肉を求めたが、ヴァルがくれたあの猪は殆どがルファイの腹に収まってしまった。ヴァルは昨日、猪を食べてるルファイの姿を思い出して小さなその体の何処に大量の肉が入っているのか凄く気になった。

一味全員がキツチンに集合して朝ご飯を食べてから食料探しに行くことにした。ヴァルはこの島を知り尽くしているので一味全員を背中に乗せて森の中を歩いていた。

「ヴァル、アナタがこの島の事を知っている唯一の人だから、食糧のありそうな場所の案内お願いね？」

「ワフー！」

ヴァルはナミの言葉に意気込み良く答えた。狼の姿で生活をしていた事が原因なのかはわからないが、ヴァルは人よりも狼の姿になると良く吠えて返事をしていった。

歩みを進めて川の流れる少し広い場所に出た。そこには木に果実が実り、川には新鮮な魚が泳いでいた。それに加えて地面には自然に育っているトマトなどの野菜もある。一味にとって、これ程までにありがたいものは無かった。一味はおお！と声を上げて喜ぶ。

「食い物だらけじゃねえか！助かったー！ありがとうよヴァル！」

「美味そー！」

「いや食おうとすんな！また探さなくちゃいけねーだろ！」

「野菜も自生してんじゃねえか。これで栄養問題は解決だな」

「ありがとうヴァル！！これで食糧難は無くなったわ！」

一味の嬉しそうな声を聞いてヴァルも嬉しくなった。

「よし！食糧を集めるぞー！！」

「「「お——！！」」」

「アオオオオオオオオン！」

食糧を集めてから時間が経ち、お昼になった。一味とヴァルは持ってきた籠一杯に食糧を入れて船に戻った。船に詰めていって遂に食糧庫が一杯に埋まった。これで暫くは食糧が尽きる事は無くなった。ルフイが食べ過ぎ無ければだが…。

食糧を探す為にこの島に上陸した一味は、もうこの島に居る必要が無くなったがまだ船を出航させなかった。

昨日の夜、船長のルフィがヴァルを仲間に引き入れると決めた事でルフィがヴァルを仲間に誘う事を待っていたのだ。

一方のヴァルは、一味を船に戻してから一旦森の中に戻っていた。ナミが直ぐに戻ってくるのよ？と言うと、ヴァルは返事をして森に消えて行った。

ルフィは船から降りて地面に座り込みヴァルの帰りを待っていた。1時間程してからヴァルの姿が見えた。ヴァルは口に何かを咥えながら走って来ている。

「ヴァル、遅せーぞお前！ん？何持ってたんだ？」

ヴァルは口に咥えていた物を地面に置いた。見ると、ヴァルは俗に言う宝箱を持って来ていた。

「「おおおお！宝箱だああ！」」

「中には何が入ってたんだ？」

ヴァルは宝箱の蓋を壊さないように開けると、中には金色に輝く財宝が一杯に溜まっていた。ナミが財宝を見て目がペリーマークに変わる。

「財宝!!!しかも、宝石も一杯!!!もしかして……これくれるの？」

「ワン!!」

ヴァルは返事をした。ナミが嬉しそうに宝箱に飛びつく。

「ありがとうヴァル!!!お宝、お宝♪」

ナミが宝箱の中身を物色し始めると、中から一枚の紙を見つけた。昔に入れられたのが黄く変色している。紙には何か書いてあった。

一味が宝箱に近付いて紙を読む。

『いずれ娘と出会う者へ、この宝を送ります。』

紙にはそう書いてあった。ナミは紙を見てヴァルの持つドツグタグを思い出した。

昨日キツチンで話し合いが終わってナミは部屋に戻るとヴァルがもう眠っていた。起こさないように扉を閉めて、ヴァルの傍に寄る。良く寝ているのを見て頬を緩めた。ふとドツグタグが目映った。ドツグタグにはヴァルの名前が書いてある。ドツグタグを手にとって確かめた。試しに裏を見ると名前では無く文字が書かれてある。

文字を見たナミは動きを止めた。

『我が娘ヴァル。誰よりも強く、誰よりも逞しく生きなさい。』

文字の書き方からしてヴァルの母親によつて書かれたものだと思感じた。ナミは親が居らず、血の繋がらない育ての親と義姉と生活していた経験からヴァルと自分を重ねた。これを書いた人はどんな思いでヴァルにこれを託したのか、考えると切りが無いが一つだけ分かった事がある。ヴァルは確かに親に愛されて生まれてきた事がこのドツ

グタグで証明されていた。

「何だこれ？誰が書いたんだ？」

「娘って書いてあるから、親が書いたんじゃないか？」

「良く分からねえが、この島に来た時にヴァルとこれを置いて行ったんだろ」

紙を読んでウソツプ、サンジ、ゾロが話しているとルフィがヴァルに近付いた。ヴァルは宝箱の前でお座りをして一味を見ていた。

「この島に来てから、ヴァルには世話になりっぱなしになったな。ほんと、ありがとうな！」

「ワン」

ヴァルとルフィは視線を合わせて暫く見つめあった。ルフィは真剣な顔をして見つめてから、ニッコリと笑って手を伸ばした。

「俺はこの世界の海を旅して海賊王を目指してんだ。ヴァルも仲間になったら冒険がもっと楽しくなって、俺は思ってる！」

「……………」

「ヴァル、一緒に海に行こう!!!」

「この島で生活をしてから一度も誰かと会う事が無かった。でも、みんなが島にやって

来てからの2日間、出会って少ししか時間が経たないが、居心地がとても良かった。今まで感じる事の無い感情に毎日がワクワクするものがあつた。ルフィ、ゾロ、ナミ、ウソップ、サンジ。それぞれの名前も覚えた。生まれてから今まで、ここで暮らして生きてきたが、みんなとここで別れたら多分一生後悔する。そんな考えが頭をよぎつた」

シユウウウウウウ：

ヴァルは狼から人の姿に戻つた。今度はナミの服を脱がずに変身をしていた。

ヴァルはルフィの手にゆつくりと手を置いた。ルフィは目を輝かせてヴァルの手を握る。手を握つたまま、一味に見せて叫んだ。

「よっしや——!!ヴァルが仲間に入ったぞ——!!!」

「!!おおおおお!!!」

みんなの顔が花が開いたように明るく笑っているのを見て、ヴァルはみんなの群れに入った事を実感した。群れでは無く仲間に入ったのだが、そこは些細な事だ。

こうして、麦わら海賊団に狼の幼女ヴァルが加わつた。ヴァルが仲間に入った事で、これからの物語に少しばかり変化が起きる事を彼らは知ることは無い。しかし、波乱に満ち溢れたこれからの冒険の中に、掛け替えの無い大切な仲間が出来た事を、彼らは

悟
つ
た。

幼女、山を越える

ヴァルが麦わら海賊団の仲間に加わり、島から船が出航する時が来た。

船の名前はゴーイング・メリー号と呼ぶらしい。乗って直ぐに教えられた。

ヴァルは徐々に離れていく島を船の最後尾にある手すりを使って背伸びしながら眺める。物心ついた時から育った故郷とも呼べる島の為か、何処か寂しいような表情を浮かべた。仲間達はそんなヴァルを陰ながら様子見していた。

暫く様子見していると、ヴァルがこつちに戻って来た。顔には悲しさは全く無く、無表情に戻っていたが目には新しい道に進む覚悟が込められている。

ゾロがヴァルの表情を見て感心する。

「へー？もう吹っ切たか。良い根性してるじゃねえか」

「テメー…何を上から目線でヴァルちゃんを見てんだ！このクソマリモ頭がああ!!!」
「何でお前が切れてんだごらああ!!!」

みんなの元に戻るとサンジとゾロが何故か喧嘩をしていた。この2人はいつも何かに付けて喧嘩をしている為、逆に仲が良いのかとヴァルは思い始めていた。

ナミが目をウルウルさせながらヴァルに抱き着いて頭を撫で始めた。ヴァルは気持

ち良さそうに目を閉じる。

「貴女って本当に偉い子なのねえええ……。私、ヴァルの為だったら何でも協力するから何時でも頼って来てね？」

「……………」

サスサスツ

ヴァルは抱き着いて泣きそうになっているナミを見て、何で弱々しい声を出しているのか分からなかったが、ナミを慰める為に頭を撫でた。

「ぐづぐ、ヴァル、ウウウウ……」

ナミは更に泣きそうになってヴァルを抱きしめた。思っていたのとは違う展開にヴァルはますます頭を悩ませながら頭を撫で続けた。

ルフィとウソップは仲間達の姿を見ていた。

「ほんつと、ヴァルは面白れー奴だなあ」

「いやそのツツコミはおかしいだろ」

ヴァルと共に出航をして暫くすると東の海から入る偉大なる航路の玄関口が見えて来た。

イーストブルー

グランドライン

玄関口となるその名はリヴァース・マウンテン。

文字通りの巨大な山だ。この世界は「RED LINE」と呼ばれる物凄く高い赤い大陸によつて4つの海域に分断されている。世界をぐるっと一周しているため、海域を行き来する為には「RED LINE」にあるリヴァース・マウンテンを越えて行かねばならない。他にも方法があるが、これが1番安全な航路として数多くの人々に活用されている。

そして、「RED LINE」と丁度対角線を書くようにして存在しているのがグランドライン偉大なる航路だ。

リヴァース・マウンテンに船が近付くと、目の前には巨大な壁のような山が出現した。上を見ても頂上が見えて来ない。

ヴァアルは身長が小さい為、見上げると余計に首が痛くなつた。島から出て直ぐに初めての経験がわんさか飛び込んでくる。新しい物だらけで混乱しそうになつたが、ワクワクが止まらない。

「ウツヒヨ———！でけーな———！！」

ルフィが思わず叫んだ。みんなも山を見て呆けている。

「もう山じゃ無くて壁だろこれえ…」

「あ！あつた、入り口！ほらあそこ！」

ナミが何かを見つけてみんなに言つて指を刺した。刺された方を見ると、確かに山にポツンと門のような入り口があつて海流が山に昇つて行つてゐる。

「話には聞いていたが……一体どういう原理だよ」

「ちよつとアンタ達!!いつまでそうしてるの!早く舵を取つて!ここからが正念場よ!」

リヴァース・マウンテンの一番の難所は途轍もない海流の力で門にぶつかりそのまま海の底へ沈んでいくことだ。半端な者達ではまず門を潜り抜けることは不可能で、一定以上の技量を持つ者しか越えれない偉大なる航路グランドライオンに入る前の試練にもなつてゐる。門から上がつていく海流の流れに乗つてしまうと、逆方向に進路を変えることは不可能。正に、進むか死ぬかのどちらかしか無い。麦わら海賊団もその試練に挑もうとしていた。

皆が一斉に動き出して船を操作する準備に入る。ヴァルもナミから指示を貰つてマストの上上がり、帆を上げ下げして微調整する配置に着いた。全員が協力し、船は上手く門を潜りそのまま真っすぐ山を海流に乗つて昇つて行く。段々辺りが白くなつてきた。ナミから教えて貰つたが、これが雲と呼ばれる物らしい。雲とは空に浮かんでゐる物で、今自分達は雲のある高さまで来たのだとナミが言つた。

「おお!雲の中に入った——!」

門を過ぎれば後は流れに乗って行くだけなのでヴァルも上から降りてみんなの元に戻る。船はまだまだ山を昇って行き、雲を抜けると山の頂上が見えた。船から下を覗いて見ると雲が下にあった。ついに雲よりも高い所に出たらしい。頂上付近では海流が他の海から来た海流とぶつかって水しぶきを上げていた。

船が頂上に着くと海流の勢いで一瞬中に浮いた。体にフワつとした感覚が広がり少し怖かったが、すぐに船は海流に着陸して山を下り始めた。

「見えた、あれが偉大なる航路……行くぞ、ヤロー共——!!!」

「!!!」

「……」

グツ!

ヴァルも手を強く握って前方に見える偉大なる航路を見据えた。

これから新しい冒険が始まる。

幼女、クジラとお爺さんに出会う

リヴァース・マウンテンを下り始めて時間が経った。昇った時と同じように雲を抜けて海が見えてきた。みんな嬉しそうに声を上げていると、突如目の前の海水が押し上がった。出てきたのは全長何メートルあるのかも分からない黒い物体だった。

「ク、クジラああああ?!」

「ででで、デッカ——!!な、ななななな、なんじゃありやあ——!!!」

「何でクジラがあんなにデカいんだよ!どうなってんだ!!」

見たことが無いもので良くわからなかったが、目の前に出てきた黒い物はクジラと言わらしい。この山程では無いがそれでも途方も無い大きさで、出てきただけで海面が揺れて船が転覆しそうになったが、何とか船を転覆させないことに成功した。クジラはそんな一味に気付かず山を見上げて吠え始める。余りにも大きい咆哮で鼓膜が破れそうになった。

ヴァルはみんなが耳を抑えて耐えている姿を見て、何を思ったのかクジラと呼ばれるものが攻撃をしてきたと勘違いをした。能力を使って体を狼に変えて段々と大きくなっていく。大きくし過ぎると船が潰れてしまうので船が潰れない大きさに止めた。

ヴァルはクジラに向かって威嚇を始める。

「ガルルルル…!!!」

吠えていたクジラがヴァルの唸り声に気付いた。目だけを動かしてヴァルを見ると、凄まじい恐怖に襲われた。ヴァルは牙を？きだして今にも噛みつきそうな状態をしている。体はクジラの方が大きいのが、本能による物なのか確実に命を奪われる光景が脳裏に掠めた。クジラは身の危険を感じて、これ以上ヴァルを怒らさないように吠えるのを止めて静かに体を震わせながら海の中に戻り始める。戻り過ぎて頭为天辺しか見えなくなつた。

ヴァルがクジラをビビらせた光景を見てクルーのみんながポカーンとした顔をした。みんなが我に返ると、ヴァルの近くに集まってよーしよしよしと体を撫で始める。ウソップとナミは泣きながら感謝の言葉を言った。

「ヴァル、 ヴヴヴヴ!!! お前、俺達の為にクジラ倒しちまったのか？ ありがとう
なあああああ!!!」

「ありがとうヴァルウー！ 怖かつたよ——!!!」

ヴァルは体を小さくして狼よりちよつと大きいぐらいの大きさになつた。泣いている2人に近づいて顔を舐める。舐められた2人はますます涙を流した。

「滅茶苦茶良い子だああああ!!!」

サンジが目を♡マークにしながらいってきた。

「ヴァルちゃあああん♡ 助けてくれたお礼に今から特上の肉を使った料理を用意するね——!!」

「あ? おいアホコック、俺にも酒」

「サンジ! 俺も肉!」

「おめーらは何もしてねーだろ——!!!」

クジラが隠れてから一味達は馬鹿騒ぎを暫く続けた。

思う存分騒いでから落ち着いて辺りを確認した。ヴァルは元の姿に戻ってサンジに作って貰った肉料理を食べながら見渡した。山を下り切った船は海の上にプカプカと浮いている。近くにある小島には灯台が立っていた。人の姿も見える。高齢のお爺さんだった。一味は灯台に近付いて確認する。

「おい爺さん、アンタ誰だ? ここで何してる」

ゾロがお爺さんに尋ねた。お爺さんは椅子を持って来て新聞を読みながら一味を睨みつけた。

「「「「「……」」」」」

一味が構えて返事待つと暫くして口を開けた。

「…人に物を探ねる時は、まず自分から名乗るのが礼儀じゃ無いかね?」

「……あ、ああそりやそうだな。悪かった、俺の名は……」

「私の名はクロツカス、この双子岬で灯台守をやっている。歳は71歳だ」

「今名乗るのが先つて言ったよなあ!!?」

ゾロは思わず刀に手を掛けた。サンジがゾロを抑える。

「落ち着けバカ!それで、アンタ俺達の敵か?敵なら容赦しねえぞ」

クロツカスがサンジの言葉を聞いてまた睨みつけて来た。一味はまた構えて返事を待つ。

「…辞めておけ、死人が出るぞ」

「ひいひい……!」

ウソップの悲鳴を上げた。サンジは冷や汗を出しながらクロツカスに聞き返す。

「へえ?誰が死ぬつて?」

「私だ」

「お前かよ!!?」

サンジも思わず腕を巻くつて喧嘩越しになる。ウソップが両腕を押さえて止めた。

「先程ここに暮す巨大なクジラが吠えたと思つたら静かになつたのでな、様子を見に出たんだが……。一体何をした?」

「それならヴァルがビビらせて海の中に頭隠したぞ?」

「何？」

みんながヴァルを指さした。クロツカスはヴァルを見て目を見開いたが、直ぐに目を元に戻した。

「嘘を言うな、まだほんの子供じゃないか」

「「「いや、嘘じゃねえよ」」」

みんなが揃って手でツツコミした。ヴァルはみんなの反応に料理を食べながら首を傾げた。クロツカスはヴァルを見てまだ信じられないような顔をしている。

「まあ嘘だろうが何だろうが、お前達がラブーンを止めてくれた事に変わりは無い。礼を言う」

「ラブーン？」

クロツカスはラブーンについて話し始めた。

ラブーンと呼ばれたクジラはアイランドクジラと言う種類の世界最大のクジラでウエストブルーに生息する生き物らしい。今から50年以上前にウエストブルーから海賊と共にやって来た時に、まだ幼く小さかったラブーンはこの双子岬で預かることになり、海賊達はいつか必ずまた戻って来る約束をした。

それから50年、一度も海賊達は戻って来ていない。何処かで解散したか、それとも余りに強大な他の海賊団や海に恐れをなして逃げ出したのか、理由は分からないがラ

ブーンは約束を破られた。

クロツカスはラブーンに海賊団は壊滅したと伝えてもラブーンは聞く耳を持たず、「RED LINE」に頭をぶつけ続けている。その為、ラブーンの頭は傷だらけで、このままだといつか死んでしまうので、クロツカスはラブーンを治療し続けていた。

クロツカスの話を聞いたルフィは暫く黙り込んだまま考えた。すると遠くから船の音が聞こえた。見ると小舟に奇抜な男女2人が乗っている。女の方は美形でサンジの目が♡マークになっていた。丁度ヴァルが料理を食べ終えてサンジにお皿を渡して服を引っ張る。サンジはヴァルに目線を合わせる為にしゃがみ込むと、ヴァルはありがとうの意味を込めてサンジの頭を撫でた。サンジが目を♡マークにして空に浮かび上がるぐらい体をフワフワさせる。

クロツカスがこつちに来る2人を見て顔を歪める。

「また来たのかアイツらは」

「あの2人知ってんのか？」

クロツカスが言うには、あの2人は近くの町に住む輩でラブーンを仕留めて食糧にしようとして企んでいるようだ。ラブーンは大き過ぎる為、中々痛手を与える事が出来ないが、懲りることなくやって来ては銃弾をラブーンに向けてぶっ放す悪党共。最近では大砲も積んで来ていてラブーンの身に危険が増えているらしい。

ヴァルはラブーンが吠えている時の事を思い出した。吠えている時、怒りや悲しみと何かを待つ感情を確かに感じ取れた。みんなに攻撃した（誤解）のは許せないが、ラブーンなりに気持ちをぶつけないと居られなかったのだろう。

ヴァルはルフィを見つめる。ルフィはヴァルの気持ちを理解して命令を出した。

「俺もクジラに用が出来たからぶっ飛ばして良いぞ。ただし、命までは取るなよ」

「コクツ」

ヴァルはもう一度狼に変化して大きくなつてからウソツップにロープを啞えて持つて行った。ウソツップは良く分からなかったが、何となくヴァルの体にロープを巻き付けると、硬めにロープを縛った事を確認すると、ヴァルは小舟の方に跳躍した。跳躍の衝撃で船が揺れたが、それよりもヴァルの行動に一味は驚愕した。何とヴァルは小舟に向かって頭から飛び掛かり大きな口で乗っている2人ごと小舟を噛み砕いた。

「「ええええええ木端微塵にしたー！！」」

思わず2人を殺したかと思つたら口には小舟に乗っていた2人が啞えられていた。ヴァルが海に沈みながら啞えていた2人を思いつきり遠くへ飛ばした。一味は慌てながらヴァルが溺れる前にロープを全力で引っ張る。ヴァルは引っ張られながら海水によつて力が抜けて元の姿に戻っていた。ヴァルは海水に触れた途端、力が抜けた感触が新鮮なのか手を閉じたり開けたりしている。船に上がつて来たヴァルにみんなが説教

をする。特にナミが怒っていた。

「あつぶねーだろ!!」

「飛び込むとか何考えてんだ!!バカヤローめ!!」

「ヴァルちゃん!危ないことしちゃダメでしょ!」

「ヴァル!いきなり海に飛び込むなんて、何考えてんの!!貴女能力者なのよ!!?」

「?」

ヴァルは能力者と言われて首を傾げる。みんながそれを見て察した。

「二二(あ、そう言えば能力者って事教えて無かった...)ヴァル(ちゃん)、怒ってごめん

...俺(私)達が悪かった」二二

みんなが段々表情を暗くさせていってヴァルに頭を下げた。ヴァルは何でみんなが怒ったのから急変して謝られた理由が分からず、オロオロとしている。

「ニツシシシ!スゲく吹っ飛ばしたなー」

「二二笑ってんじやねーよ!!!」二二

ガーンツ!

「ず、ずみばぜん...」

ルフィがみんなに殴られて頭にタンコブが4つも出来た。痛そうだけど、何故か可哀想とは思えなかった。

ルフィはみんなに殴られた後、船のマストを壊してラブーンの頭に突き刺した。みんなはマストを壊したルフィに怒鳴りつける。ラブーンは余りの痛さに体を浮かび上がらせて悶えた。海面が大荒れになって転覆しそうになる。ラブーンはマストを突き刺されたお返しに小島にある灯台に思いつきりぶつけた。ルフィとラブーンが喧嘩を始める。どちらも中々良い勝負を繰り広げた。

ラブーンがルフィを灯台に吹き飛ばしてから突進して攻撃しようとする。ルフィは小島に立つて突っ込んでくるラブーンに言った。

「引き分けだ！」

ラブーンは思わず止まった。ルフィはラブーンの目を見ながら宣誓する。

「俺は強いだろう？俺に勝ちたいだろうが！俺達の勝負はまだ着いてねんだ、だからまた戦わなきゃならない。お前の仲間は死んだけど、俺はずっとお前のライバルだ！必ずもう一度戦って、どっちが強いのか決めなきゃならない！俺達は偉大なる航路を1周したら、またお前に会いに来る！」

ラブーンが目をウルウルさせる。ルフィは笑って約束した。

「そしたらまた喧嘩しよう！今度は俺が絶対勝ち越してやるからな！」

ラブーンは涙を流して嬉しそうに空へ向かって吠えた。クロツカスや一味全員はラブーンを優しく見守った。

幼女、母親を知る

「出来たー！」

ラブーンが鳴き止むとルフィはペンキを持ち出してラブーンの頭に海賊旗と同じマークを描いた。絵はとても上手とは言えないある意味のある物になっている。ルフィはペンキ塗れになりながらラブーンに言った。

「これが、お前と俺の戦いの約束だ！俺達がまたここに帰って来る時まで頭ぶつけてそのマークを消したりすんじゃねえぞ？」

ラブーンは一声鳴いて応えた。

「よーしーしー！」

ヴァルがルフィが描いた絵を見ると、クロッカスが近付いて来た。ヴァルはクロッカスに気付いて顔を向ける。

「さっきは信じられず済まなかったな。まさか本当の事だったとは」

「フルフルッ」

ヴァルは首を横に振って謝らなくて良いと伝えた。クロッカスは微笑んだ後、ヴァルの首にあるドッグタグを見つけて驚愕した。

「ま、まさか、そのドッグタグは……！」

「おい爺さん、まさかヴァルの事知ってんのか？」

「まさか…、すまんがそのドッグタグを良く見せてくれんか？」

「コクツ」

ヴァルはドッグタグを首から外してクロツカスに手渡した。クロツカスはドッグタグの表裏を確認して懐かしい表情をしながら目を潤ませた。

「ああ、…あの子の持っていたドッグタグにそっくりだ。それにこの特徴的な文字の書き方、間違いない」

「クロツカスさん教えて！まさかヴァルの両親を知ってるの……？」

一味全員がクロツカスに注目した。クロツカスは眼鏡を外し目元を拭ってから答える。

「正確には母親は確実に分かった。私が海賊をしていた頃の仲間の1人だ」

「爺さん海賊だったのか？」

「そうだ。私は昔、数年程オーロジャクソン号の船で船医をやっていた。その時にはこの子の母親も乗っていた」

「それって…海賊王の船だぞ!!爺さん、アンタ海賊王のクルーだったのか☒それにヴァルちゃんのお母様も同じクルーだと☒」

クロツカスは頷いた。眼鏡をかけてからヴァルを見て懐かしそうに見る。

「良く見ると、髪や顔立ちもあの子にそっくりじゃないか。母親似で美人だな」

「おい、勿体ぶらずに教えてくれよ！ヴァルの母ちゃんはどんな奴なんだ！」

ルフィがヴァルの母親が海賊王のクルーだと聞いて興奮気味に言った。みんなも気になってしょうがないらしい。ヴァルも気になるのかクロツカスの言葉に集中した。

「母親の名前はヴァン||リーベ。苗字は無いそうで名の意味はヴァンの愛と言っていた。ヴァンと言うのは彼女の一族が昔から名前に含んで来た一種の伝統らしい。彼女は船の中でも結構な古株の1人で、良く仲間達がバカをすると拳骨をしていたなあ…あれは痛かった。まだ20歳になる前、18の時には既にクルーから姉さんと呼ばれていた」

「||「ヴァルの母ちゃん（お母様）（お母さん）スゲー…||」」

一味の頭の中にはヴァルの容姿に男を殴っているお姉さんの光景を浮かべた。クロツカスも思い出して顔を青くしていた。

「美人だから怒ると凄く怖くて、しかもクルーの中でもメチャクチャ強い部類だったんだ。私も良く半殺しにされていたよ…」

「||「||（何したら半殺しにされるんだよ…）||」」

半殺しと聞いて、ヴァルの頭には巨大な猪がクロツカスに乗っかっている光景が浮か

んだ。ちよつとズレている。

「ま、まあ兎に角。この子の母親はとても強かったと言う事だ。解散してからは全く連絡を取っていないから行方は分からず仕舞いだかな」

「そつかー…ヴァルの母ちゃん、海賊王のクルーだったのかあ。ヴァル、お前の母ちゃん、スゲー奴なんだな！」

「……コクツ」

ヴァルは頷いてからクロッカスにドッグタグを返して貰った。受け取ると、大事そうに首に掛け直す。

「でもなら何でヴァルはあの無人島に居たんだ？母親が捨てたとか？」

「何？彼女は情に熱い事でも有名だったのだぞ！父親がしたのなら想像出来るが、そんな事をする、筈、があ……」

「[[[[[[[?]]]]]]」

クロッカスは否定する発言をしていると、ヴァルを見て段々表情を暗くさせた。何か察した様子。

「因みになんだが…この子何処に居たんだ？無人島と聞こえたが…」

「ローグタウンから少し離れた無人島だよ。ローグタウンから先はリーヴァス・マウンテンだけって聞いてたから驚いたぜ。まあそれで俺達は助かったんだけどな？」

「!!」

クロツカスが驚愕して眼鏡を突き破つて目が飛び出た。どんな仕組みなのか凄く気になる。クロツカスは目を元に戻して深く考える。眼鏡は壊れていなかった。

「ま、まさか父親はアイツじゃあ……いやいやそんな訳ある筈が無い！無い、筈なんだが……。しかし雰囲気や目はアイツに似て……いやいや……だがそんな事するのはアイツしか」

「「「「「?」」」」」

クロツカスはどんよりした顔をしながら一味に言った。

「ゴホンツ!と、兎に角、良く生きてあそこから出られたな。正直言つて、あそこから生きて出られた奴を私は知らん。因みに父親は良く分からん、知つても言うつもりは無いからな?自分達で調べろ。この話はこれで終わりだ(早口気味)」

「「「ちよつと待ったー!!!今お前、話の前半何て言つた」」」」

「今「良く生きてあそこから出られたな」って聞こえたぞ爺さん!!」

クロツカスは詰め寄つて来るみんなを手で宥めた。

「あ、あそこは風の帯カムベルトの中にあるんだぞ!!数百年に一度の確率しか風も全く吹かん絶望しかない無人島!海王類にも遭遇せず、逆にそこから出られたお前達がおかしいんじゃない!!」

ナミが風の帯と聞いて青ざめた。

「い、今、風の帯カームベルトって言った？あそこ、もう風の帯カームベルトの中だったの？」

「何？知らなかったのか？なら、相当な幸運の持ち主だったのだな、お前達は」

風の帯カームベルトとは、無風状態の特殊な海域で海王類の巣としても知られている。偉大なる航路グランドラインを挟み込むようにあつて、偉大なる航路グランドラインに入る1番の障害である。海王類とは、その名の通り海に君臨する王者のように巨大な体を持ち誰も勝てない存在として恐れられている。遭遇したら、まず命は無い程だと言う。

ヴァルが居たあの島は、東の海イーストブルーの中にある事がおかしすぎる程恐ろしく強い猛獣が生息する珍しい島に加えて、風の帯カームベルトの中にある為、ローグタウンなど地元島民からは「処刑島」と呼ばれているらしい。

「……(ヴァル(ちゃん)、お前(貴女) 凄い奴(子) だったのか……)」

みんなはヴァルを見てしみじみ思ったがヴァルはドグダグを見つめていて気付かなかつた。

「ん？あ、あ……!!!」

ナミが突然叫んだ。見ると方位磁石を見て泣きそうになっている。

「コンパスが壊れてる！」

「それはそうだろ。ここは偉大なる航路グランドライン、普通のコンパスは使い物にならんぞ」

クロツカスが当たり前の事であるかのような口振りで言った。ナミが悲しみに崩れ落ちる。ヴァルがナミを見て何かを取り出した。

ツンツンツ

「ヴァル？見てわからない？私今凄く落ち込んでるの…」

コトツ

「ん？」

音がして見ると、ナミの目の前に方位磁石に似た何かがあった。

「おお、ウイスキーピークの方角が入った永久指針じゃないか。何処から見つけて来た

？」

「エターナルボイス永久指針？」

永久指針とは、この偉大なる航路で使われる2つのコンパスの内の1つで、記録してい

る島限定だが何処に居ても記録した島に針が指し示す物だ。

もう1つは記録指針ログボイスと言って、偉大なる航路グランドライオンに点在する様々の島に含まれる特殊な物が島と島を引き合う磁気を記録していく物だ。

ヴァルが何故永久指針を持っているかと言うと、小舟に嘯みついた時、乗っていた2人が持つ永久指針エターナルボイスをも口の中に入れてしまひそのままみんなに引つ張られた為、ヴァルが所持していた。

ヴァルは小舟の残骸が浮かんでいる所を指差して持っている理由を伝えた。ナミは目を潤ませてヴァルの体を抱きしめて頭を撫でて褒める。

「ヴァルウ、貴女は本当に良い子ねえ：後でサンジ君にお菓子作って貰いませよ」

「成程アイツらの持っていた物か。なら私からはこの記録指針をやろう。上手く使いなさい」

クロツカスが記録指針を取り出してナミに渡した。至れり尽くせりの状況でナミの機嫌が直った。

クロツカスは忠告としてログの重要性を伝えてくれた。偉大なる航路は記録指針が記録するログによつて航海をして行かなければならない。記録指針は自分達から一番近くにある島を指し示すが、島に上陸して島のログを溜めなければ記録指針は次の島を指さない。ログが貯まる期間は島ごとに違つていて、最速で数時間の時もあれば、数年もかかる島もある。数年もログが貯まるのを待ちたく無い時は、ヴァルが持っているような永久指針エターナルポイスを使って他の島に行く脱出方法が存在する。永久指針は人が集まる大きな島であれば店で売買されている。

「最初の航路は7つの内の1つを選ぶ事から始まる。選ぶ航路はお前達の自由だ。因みにどの航路を選んでも最終的には繋がっている。この世界で海賊王しか辿り着けていない最後の島、「ラフテル」だ」

「ラフテル」…」

「お前達のような海賊なら、そこへ辿り着くと私は思っている。ラブーンにまた戻ってくると言ったんだ、そのくらいは出来てもらわなければな」

ルフィはその言葉を聞いてニツコリと笑った。やる気が底上げされたようだ。

「当たり前だ!!俺は海賊王になる男ぞ!」「ラフテル」だって、必ず見つけてみせる!」「爺さん!」「ラフテル」とか何とか言わず教えてくれ!海賊王のクルーなら、『ONE PIECE』が実在してるか知ってんだろ?」

「ウソツプ!!!」

ルフィがウソツプに怒鳴った。ウソツプは思わず口を閉ざす。

「言うな!行けば分かる!」

「ああその通りだ、行つて確かめれば良い。その為に冒険があるのだから」

クロツカスはルフィを見て誰かの面影を見ていた。

一味はそろそろ出発の準備を始めた。ルフィがクロツカスにお礼を言う。

「爺さん、色々世話になったな。ありがとう」

「礼は良い。お前達の冒険を祈っておく」

船が出航して双子島から離れて行く。ルフィがラブーンに向かって叫んだ。

「じゃあなーー!!行ってくるぞ、クジラーナーー!!!」

ラブーンは麦わら海賊団に向かって吠えて、クロツカスは手を振って見送った。

幼女、最初の島へ行く

双子島から出航して少し経ち、島の影も見えなくなつた。一味はウイスキーピークへ向かう航路を選び、エターナルボイス永久指針の指す方角に進路を進めていた。進んでいると段々空から雪が降り始めて冬のように寒くなつた。

「一体何なのこの雪は？ さっきまでポカポカで暖かかつたのに……」

イーストブルー東の海ではあり得ない気象現象にナミの頭は混乱した。

「おっしや出来た！ 空から降つて来た男、雪だるさんだ！」

「ふっふっふ、全く低次元な雪遊びだなオメーのは……」

「何？？」

「見よ！ 俺様の魂の芸術、雪狼のヴァルだ!!」

「スツゲー！ ヴァルにソックリだあ！」

船に積もつた雪でルフィとウソップが雪遊びをしている。ナミは冬服と耳当てを着込み船内の窓から外を見ていた。

「こんな寒いのに、何でアイツらはあんなに元気なの？ しかも雪掻き全然進んで無いし……」

ルフィとウソップが楽しく遊んでいると、大きな影が音も無く現れた。
ベチャツ

「あー！ー！！ヴァル！何すんだこのヤロー！」

グシヤツ

「コラー！折角お前ソツクリに作ったのに簡単に壊すな！！」

「アウ？」

ザツ、ザツ…ボチャン！

「興味無いかよ？？そして何事も無かったように雪を捨てるなー！」

ヴァルは船に積もった雪が歩く時に邪魔なので狼の姿で雪掻きをしていた。大きい前足で掻く度に大量の雪が海の中に消えて行く。無人島は風カームベルトの帯にあるので雪は見た事が無かったが、野生児なので雪遊びの楽しさが良く分からなかった。また、メリー号は群れ（仲間）の一員と言われたのでメリー号のためにヴァルは黙々と雪を落としていった。

ナミは献身的に雪掻きをしてくれるヴァルと雪だるまを壊されて怒っているルフィとウソップを見比べ、幼女（巨大な狼）が良く働き年上の少年達の方が役に立っていない事実がに頭が痛くなった。

「ナミさん！恋の雪掻き、如何程に？」

「止むまで続けてサンジ君」

「YESナミさん！」

サンジがナミの命令で雪掻きを永遠と繰り返していた。本人は嬉しいようで問題は無い。それ何処か、ヴァルに寒い中雪掻きをして貰っていることにナミは罪悪感を覚えていた。

「おい君、この船に暖房設備は無いのかね？」

「寒いわ」

「うっさいわね！アンタ達客じや無いんだから雪掻きでも手伝って来なさいよ！助けて貰った恩を忘れたか！」

「(元はと言えば、あの狼のせいだけどな……)」

何故ここに飛ばされた2人が居るのかと言うと、ウイスキーピークに向かっている途中、ヴァルが遠くへ吹き飛ばした2人組が海で漂っていた。泳いでウイスキーピークに帰ろうとしていたが永久指針エターナルポイスをヴァルが持っていた為に遭難していた。そこへ丁度一味が遭遇して船に乗せたが、ヴァルは余所者が船に入り込んだと思い、2人が乗ってからは狼の姿で警戒を続けている。この時既に2人を投げ飛ばしたことをヴァルは覚えていなかった。

男はMr. 9、女はミス・ウエンズデーと名乗り本名を名乗ろうとせず、毛布に包ま

り不満を零している。

ゴロゴロゴロゴロ…ピシャンツ!!

「今度は雷? 一体どうなってるの、ここの天候は」

雪が降りつけている中、空は黒く厚い雲に覆われて雷が鳴った。

「さっきまで晴天だった。と思ったら突然雪、お次は雷…、季節も天候もデタラメになつてる。クロツカスさんの言つた通りだわ」

「それがここ、偉大なる航路」

「君らは何も分かつていないようだな?」

ナミは2人に言われてムツとした。ミス・ウエンズデーが少し悪そうな顔をして言う。

「さっきからずっと舵取って無いけど、大丈夫?」

「ん? 何言ってるの、ついさっき方向は確認済み………あ—————!!!」

ナミが永久指針を確認すると、慌てたように悲鳴を上げた。ナミの声が船中に響き渡る。

「!」

「な、何だ☒」

「どうした?」

「何事ですかナミさん」

みんなが声の方に反応すると、ナミが走って来てみんなに指示を下す。

「180度船を旋回！急いで!!」

「180度何で引き返すんだ？」

「忘れ物か？」

ルフィの的外れの言葉にナミは反論した。

「違うわよ!!船が反転して進路から逆走してるの!ほんのちよつと目を離した際に、波は静かだったのに……やられたわ!」

ナミは航海士でありながら気を緩ませた自分自身に腹を立てる。

「貴女、本当に航海士？」

ミス・ウエンズデーが揶揄うようにナミに言った。乗組員でも無い者に言われてナミは目を鋭くさせた。

「この海は風も、空も、波も雲も何一つ信用してはいけない。変わらない物は唯一記録指針と永久指針が示す方角だけ……お分かり？」

「偉そうにうだつて無いで、さっさと手伝え——!!」

「「うあああ!」」

ナミは何もせずただ見ている2人の背中を蹴って外へ蹴り出した。蹴りには揶揄れ

た怒りも込められている。

ナミも外へ出てみんなに指示を飛ばす。

「ブレイスヤード！右舷から風を受けて、左へ180度船を回す！ウソツプ三角帆を！」

「お、おう！」

「サンジ君舵取って！」

「任せろナミさん！」

「ヴァルは風を受ける帆の邪魔しないよう体を大きくして、揺れる船全体のバランスを取って！」

「ワン！」

「残りのそこ！任せた！」

「人使いの荒い女だ！」

各自がそれぞれ指示された役割に着いて動き出す。船を旋回させていると、ウソツプが何かに気付いた。

「おい待て！風が変わったぞ！」

「ウソツプ」

いきなりの風の変化に戸惑う。変化した風は先程より何処か優しく吹いていた。

「春一番だ」

「何で☒」

その頃、ゾロは一人船で寝ていた。長く眠っているせいで体に雪が積もっている。

「zzz」

「テメーは雪が積もるまで寝てんじゃねえ!!」

ウソツプがゾロに大声をかけても一切起きる気配は無かった。

船の上は慌ただしく対処しようとする者の足音でごった返していた。

「おい！今向こうでイルカが跳ねたぞ！行ってみよう？」

「アンタは黙って!!」

ルフィは致命的に不器用な上、指示を出しても余計なことをしてしまうので見張りを任されていた。

海は一味の危機的状況を顧みる事無く試練を与え続ける。

「波が高くなってきた…ツ！10時の方角に冰山発見！」

「ナミさん！霧だあ！」

「何なのよ、この海は☒」

冒険が溢れる海としても知られているこの偉大なる航路^{グランドライン}。しかし挑戦者達にとっては危険しか存在していなかった。一味は海の試練に耐え続け、船の上で右往左往行き来するのを繰り返していた。

次々と変わる天候に耐え続け、やっと進路を元に戻すことが出来た。その代償に体力と精神の限界で甲板の上でみんなが倒れ込んでいた。

その中ゾロが漸く起きた。大きな欠伸をして立ち上がると周りが倒れ込んでいる事に気が付く。

「おいおい、いくら気候が良いからって全員墮らけ過ぎだぜ？ちゃんと進路は取れてんだろうな？」

「「(お前え…)」」

ゾロの言葉に怒りが込み上がる。ふと床を見るとMr. 9とミス・ウエンズデーの2人を見つけた。

「ん？何でお前らがこの船に？」

「遅っ！」

ゾロが不思議そうにしていると、みんなが倒れている中1人だけ元気なルフィが答える。

「ウイスキーピークに向かう途中で拾ったんだ。コイツ俺達が行くウイスキーピークから来たらしいから次いにな」

「まさか送ってやんのか？何の義理もある訳でも無いし…」

「うん、無えよ？」

「まあ別に良いけどよ」

ゾロは2人の前にしやがんで顔を覗き見た。2人は何故か冷や汗を掻いている。

「おおお悪い事考えてる顔だ♪名前、何だったかなお前ら？」

「ッ！」

2人は顔を引き攣らせながら言う。

「ミ、Mr. 9と申します…」

「ミス・ウエンズデーよ…」

ゾロは名前を聞いて悪人面をさらに悪くする笑みを浮かべた。

「そう…、どうもその名を初めて聞いた時から引つかかっていたんだ、俺は。何処かで聞いた

事があるような無いような…」

「ギクッ！」

「まあいずれにしろ」

「ゴンッ!!」

「どわっは☒」

喋っている途中でゾロの頭に拳骨が降って来た。殴られた勢いで額を床にぶつける。ゾロの後ろに怒りのオーラを浮かび上がらせたナミが居た。

「アンタ、今までよくものんびりと寝てたわね? 起こしても、起こしてもグウグウと…」

！」

「あ、あ、？」

ゴーン！ガン！！バゴーン！！

ゾロは殴られて額に血管を浮かび上がらせると、それを見たナミがさらに拳骨をくらわした。頭にコブがいくつも出来てゾロがうずくまる。ヴァルはそんなゾロの頭を舐めて慰める。

「クウーン…」

ペロペロツ

「ヴァ、ヴァル…、今は、辞めてくれ…し、沁みるう…」

ヴァルに舐められた事によって、ゾロはさら痛みが増えた。

ゾロを無視しつつ、ナミはみんなに注意を出す。

「気を抜かないでみんな！まだ何が起こるか分からない。今やつとこの海の怖さが、グランドライン偉大なる航路と呼ばれる意味が理解出来た！この私の航海術が一切通用しないんだから間違い無いわ！」

ナミは拳を握りながら潔く言い切った。

「キツパリと…大丈夫かよそれ？」

「大丈夫よ！それでも、きつと何とかなる！その証拠に、ほら！」

「「「おおお……」」」

ナミが指を指した先には海を包んでいた霧が晴れて前が見え始めた。まだ遠くだが、島も見える。一味の目指していた最初の島ウイスキーピークがあった。

「島だ！」

「あそこがウイスキーピークか……しっかしヘンテコな島だなあ」

「デツカイサポテンだらけだな！」

島のいたるところにサポテンがあり、見渡せばサポテンしか目立たない。

みんなが島を見ていると後ろで足音がした。振り返ると、2人が手摺りの上に飛び乗っている。

「それでは、我らはこの辺で」

「送ってくれてありがとう、みなさん」

「いつかまた会う日まで……」

「bye—bye、Baby♪」

2人は後ろに飛んで海に潜ると、そのまま泳いで何処かへ行ってしまった。

「行っちゃった……」

「一体何だったんだアイツら？」

「ほっとけ、上陸だあ！」

ルフィは謎の2人よりも島に夢中になっていた。

ヴァルはゾロの頭を舐めるのを止めて島を眺める。島から漂う匂いに何処か焼けたような匂いが混じっていた。ヴァルはその匂いを嗅いで、警戒心を抱く。元の姿に戻ろうと考えたが、暫くの間はこのままで居る事を決めた。

幼女、歓迎の島に降り立つ

船は海と繋がっている川に入って上陸しようと川に入った。島は白い霧で覆われていて少し先の方が見えづらい。

ウソツプが不安そうに顔を青くしながら胸元をギユッと掴んでいた。

「お、おいみんな、き、聞いてくれ……急に持病の……島に入るといけない病が……」

ウソツプはつい先程言われた内容を思い出して嘘を付いていた。島に近づく前、ナミから記録指針ログポースにウイスキーピークの島の磁力が記録しなければ次の島へ進めない為、危険な生物や海賊が居たとしても島から出ることが出来ないと宣言されたからだ。

「じゃあ入るけど、良い？逃げ回る用意と戦う準備を忘れないで！」

「あ、あのお俺の持病が……。き、聞いて無いよね……。う。」

嘘がみんなの耳に入っていないことに気付いたウソツプは、何処となく寂しそうで悲しそうな声を出した。その声さえもみんなは聞いていなかった。

島の奥の方まで入ると霧がますます深まった。みんなは気付いていないが、ヴァルは霧の中で何かが歩いたり走ったりしている足音を注意深く聞いていた。人の足音がいくつもあるように聞える。そのまま進むと霧の中に居る人影らしきものが見え始めた。

「あ？何か動いてるぞ」

「人だ。人がいるぜ」

「みんな、注意して」

用心しながら船を進めていると、辺りから大勢の人の声が聞こえて来た。悲鳴と言うより歓声のような声だった。

「「「「ようこそ！ウイスキーピークへ!!」」」」

霧が晴れるとウイスキーピークの港に辿り着いたが、辺り一面に人がごった返して笑顔でこちらを歓迎していた。

ルフィとウソップは笑って人を見渡し、サンジは若い女性が手を振っているのを発見してデレデレしていた。

「このアホ共」

「何緊張解いてやがんだお前らは…。ヴァル、気は抜くなよ？」

「ワフ」

港に船を着けて上陸すると、人だかりの中から髪をロールケーキのように左右3つに巻いた人が出てきた。名前はイガラツポイと言い、このウイスキーピークの町長をしている者だと言う。このウイスキーピークは海賊だろうと海兵だろうと関係無しに訪れた者達を持って成し歓迎することが大切とされ、今までの航海の話や酒や料理を飲み食い

しながら宴会をしたいと言ってきた。それを聞いたアホ共は疑うことも無く飛びついた。残りの3人（内1人は現在1匹）はアホ共に対して冷たい視線を浴びせたが気付かれていなかった。

ナミとゾロも3人の後を追う為、船を降りる。

「よし！宴だあ！肉食うぞ!!」

「ちよつと待てルファイ!!」

「んにゃ?」

「ヴァルが船から降りようとしないの」

みんなが船を降りた中、ヴァル1人（1匹）だけが船に残っていた。舟の看板にお座りをしてナミが呼んでも頑なに降りようとしなかった。

「おいヴァル！何してんだよ、早く来いよ。肉あるぞ?」

「…」

「ヴァルちゃんが肉に反応しない、だと…?」

群れ（仲間）のリーダーであるルファイが呼んでもヴァルはジツと座っている。仕方ないのでルファイは一旦船上がるとヴァルの頭を撫でた。

「仕方ねえな。じゃあお前の分の肉持つてきてやるから、メリー号で留守番してるんだぞ?」

「ヴァル、良い子にしててね？」

「ワン」

ヴァルはみんなの背中が見えなくなるまで見送った。みんなの後に続いて人が居なくなると看板に伏せ、目を閉じた。一見寛いでいるように見えるが、耳を立てて尖らせ辺りの音を調べている。ヴァルは密かに警戒態勢を取り続けていた。

船で留守番を続ける事、数時間後。次第に空が暗くなり夜になった。島は寝静まったのか音も無くヒツソリとしている。

ピクツ

耳に何かの音を捉えヴァルは目を開けた。誰かが大勢でこちらに向かって来ている。立ち上がって目で確認すると、島の住人達が手に武器を持って船を囲んでいる。ヴァルは船から降りて船を背に立つ。住民達は不適な顔をしながらジリジリとこちらに近づく。

「コイツ毛皮にしたら、高く売れるかな？どう思うよ？」

「バカなこと言ってるじゃねえ。良いかお前ら、気を付けろよ。相手は狼だ。さつさと

殺して船を物色するぞ」

「何言つてんだよ、この人数なら大丈夫だつて」

何か話しているが気にする事無くヴァルはみんなが帰つてこないことに少し心配になつた。

ドーン！

ヒイ……！グワアツ！

直ぐに心配は無くなつた。奥の方から悲鳴や大きな音が聞こえる。多分みんなが暴れているのだと確信した。

心配の要素が無くなつたヴァルは目の前に集中して威嚇を始める。

「グルルルル……」

「ツ！」

「おい何ビビつてんだよ。少し大きいだけで、ただの狼じゃねえか」

先程から威勢の良い若い男がヴァルの威嚇に怯んだ者を見て鼻で笑つた。そのまま1人前に出て武器を構えてヴァルに刃先を向ける。

「ジツとしとけよ？ じゃないと毛皮が綺麗に？ がせないだろ」

「(ムカツ)」

ヴァルは目の前の者に侮られている事に気付き少し苛つた。島の頂点に立ってい

た者として、自分よりも確実に弱い弱者に侮られるとプライドに傷が付く。苛立ち半分と牽制の意味を込めてヴァルはある行動に移すことにした。

「オラッ!!」

男が武器を上からヴァルの頭目掛けて振り下ろす。ヴァルはその場を動かさず男の腕を見つめる。男は勝利を確信するとさらに勢いをつけて振りかざした。

ガキンツ!!

「…へ?」

ヴァルの頭に当たった筈の武器が何故か刃先の部分が壊れ吹き飛んだ。一同揃って何が起こったか理解して無い表情を浮かべている。男も武器の破片が飛んだ方を見つめたまま固まっていた。ヴァルはその隙を付いて男の元に一瞬で急接近する。

「な、何で…」

ブチッ!

「え?ブチッ?」

音がして確認する。武器を持っていた男の腕が肘の先から無くなっていった。腕が無いことに気付いた男の脳は、痛みの成分を分泌し始める。段々と痛みが増した男は顔を恐怖に染めながら後ずさりをした。千切られた腕から血が夥しく地面に落ちて染を広げた。

「あ、ああ、ああああああ!!!お、俺の腕が、腕がああああああ!!!」
「ペッ!」

ヴァルは口に啞えていた男の腕だった物を地面に捨てた。恐怖に染まった顔を見て少し苛立ちが収まる。しかし優越感は全く起きず、逆に腕を噛みちぎって思った。ゆつくり動いてあげたのに自分の姿を認識する事も出来ず、腕を取られ喚き散らしている。この程度の者が自分とメリー号を襲おうとした事実には腹が立つ。ヴァルは鼻息を一度だけフン!と荒々しく出した。

腕をいつの間にか食い千切られた男の姿を見て、住民達が武器を構える。武器からは何かが焼けたような匂いがした。島から漂っていた匂いの正体はこれだとヴァルは理解した。

「ツッ!打て打て打て、打ちまくれ!!!」

1人が叫んで武器から何かを打ち出した。ヴァルはメリー号に少しでも傷が付かないよう少し大きくなつて体を張る。当たる前に体に入力する事を意識した。

ガキン!ガキン!

「痛ってー!跳ね返った!!」

「な、何で銃弾が弾かれるんだよ…」

住民達が打った銃弾がヴァルの毛に当たると、壁にでも当たったように四方に跳ね

返った。跳ね返った銃弾の一部が数人に当たり血を流している。ヴァルは銃弾が体に当たっても特に痛く無いが、ペチペチとした感覚が絶え間なく続くのでむず痒く感じた。体を後ろ足で掻きたくて仕方が無い。顔が痒い。

これ以上痒くなりたく無いヴァルは住民達の腕に目掛けて前足で引つ掻き、怪我を負わせる。腕に深い裂傷を負った住民達は痛さの余り武器を落として行く。男の腕は噛みちぎっているが、別にヴァルは住民達に危害を加える気は全くない。殺す事も簡単だが、住民達が弱すぎると、殺したら特にナミから叱られてしまうと考えたからだ。

「ワン!!」

「ヒィヒィ……」

一度だけ吠えると住民達は恐怖に怯えた。もう攻撃を仕掛けて来る気も無くなったらしい。もう危険は無いと判断したヴァルは腕を失った男の元に近づく。痛みですつと喚いているので少し煩かった。

ドガツ!

「ゴヘツ」

男の頭を前足で踏んづけて地面にめり込ませる。気絶したようでやっと静かになった。それを見た住民達がまた怯える。

ヴァルは住民達を睨み付けながらメリー号に戻って住民達を監視しながらお座りを

する。ルフィに言われた通り、お留守番の続きをしながらみんなを待つ事に決めた。

幼女、島から脱出する

恐怖を与えて怯え切ったウイスキーピークの住民達を監視しつつ、みんなをさらに待つ事、約1時間。ナミとゾロが何故か2人組の片方の女を連れて戻って来た。

3人がメリー号の周りを見ると驚いた顔をした。メリー号の周りに島の奴らが集まっているのでメリー号を襲ったと分かったが、全員倒れてこんで血を流している。

「ど、どうなってるの？全員やられてる…」

「な、何これ☒ゾロ、これもアンタがやったの？」

「んな訳無えだろ！しつかし、凄まじいな…あそこ何て見てみるよ。地面に顔めり込まれて腕千切れてんじゃねえか。容赦ねえ」

「じゃあ、まさか…全部ヴァルがやったの？」

「ワフ」

ヴァルが返事をする、2人は驚きながらヴァルの元に近付き体をワシヤワシヤと撫でた。特にナミが褒めてくれた。

「まさかこんなに強いなんて…もう！ヴァル、貴女何でそんなに良い子なのよ！メリー号に傷1つ無いし、貴女と私のお宝も取られて無いし、もう最高!!」

「よーしよし、良い子だなあヴァアル」

「クウーン、ヘツヘツヘ♪」

ヴァアルはきちんとお留守番を果たしてメリー号を傷一つ無く守り切った事を褒められて笑顔になりながら尻尾をブンブン振って喜んだ。ナミは撫でるのを超えて、抱き着いて顔を毛に埋めながら体全体でヴァアルを撫で回す。ヴァアルはアウアウと嬉しい声を漏らしながら撫でられるのを堪能した。

まだ3人戻って来て居ないが、ルフィがサンジとウソップを探しに行ってるらしい。ナミは来る途中町の家から拝借して来た縄をゾロに渡して周りに居る者達を縛らせた。一応腕が無くなった男の腕に包帯を嚴重に巻いて、これ以上出血しないようにしてあげた。ヴァアルが人殺しになるのをナミが嫌がったからだ。

ナミはヴァアルの口元に残ってる血の後を濡らした布で拭く。奪った腕を直ぐに口から離れたお陰で着いた血の量は少なく布一枚で足りた。それでもヴァアルから血の匂いがするので、ナミは今日のお風呂は体をメインに洗う事を決めた。

「それにしても、銃持ってる奴らをどうやって倒したの？怪我して無いし…」

「おいお前、まさかヴァアルを撃つたのか？」

ゾロが縛り上げた1人に質問した。聞かれた男は怯えながら頷く。

「は、はい。でも、意味が無かったと言うか…」

「あ、あ、？」

「ヒイ！銃弾が弾かれて全然効きませんでした!!」

「弾かれたあ？どう言う事だ？」

ゾロは言ってる事が理解出来ず問い詰める。男は銃が効かなかったとしか説明出来ないのでそれしか言わなかった。

2人が連れてきた女は船に乗らずにヴァルを見て怯えている。

「ちよつとビビ、何してんのよ。早く乗って」

「だ、大丈夫かしら？その狼、噛み付いて来たりしない？」

「攻撃し無ければ大丈夫よ！多分」

「(多分☒)」

ヴァルは話してる2人を見て考えた。ナミはこの女に最初に会った時は警戒していたのに、今では気を許している。いや、信用しているように見える。気軽に名前を読んでもメリー号に乗るよう言ってるので多分そうだとヴァルは思った。しかしまだ信用出来ないのです、ナミから説明して貰ってから判断する事にする。それまでは一応姿を戻さずにしていようとヴァルは決めた。

それよりも：さつきからメリー号に乗っているこの変な鳥は何だろう。今まで見た事の無い黄色の体毛をしていて結構大きい。危険は感じ無いのでヴァルは取り敢えず

謎の鳥を放置する事にした。

「おーい！サンジとウソツプ見つけたぞー！」

ルフィがサンジとウソツプを引きずって戻って来た。サンジは足を掴まれ、ウソツプは鼻を掴まれている。土で汚れているのに全く起きる気配がしなかった。

ナミがメリー号を降りてビビの元に行く。まだ乗らないので迎えに行つたようだが、様子が変だった。

「おい！どうした！」

ゾロがナミに聞くと、ビビが渋って乗ろうとしないと言った。何でも連れているカルガモと言う生き物が呼んでも来ないと言う。ビビは先程から口から音を鳴らして呼んでも来ないと言って困っていた。ヴァルはもしやと思ってゾロの服を引っ張り鳥の存在を教える。ゾロは鳥を見ると2人に伝えた。

「コイツか？何か居たぞ？」

「クア」

「そこかーい!!」

ヴァルはこの鳥がカルガモと言う生き物だと理解する。ヴァルの頭の中にカルガモは黄色くてクアつと鳴く大きい鳥としてインプットされた。

ビビは漸くメリー号に乗り込むと島の脱出の仕方として、川を登って行くと支流があ

り、少しは早く航路に乗って行けると教えてくれた。

みんなは急いで船の帆を降ろして出航の準備をする。船の準備が出来ると直ぐルフィが叫んだ。

「よっしやあ！行くぞー！！」

ルフィの声を合図に船を出す。川に沿って進めて行くと、サンジとウソップが起きた。2人共が何故か慌てた様子でみんなに戻ろうと言い出す。ヴァルはもうこの島に居たく無いので無視する事にした。ゾロが2人を静かにしようも言い切る前にナミが2人を殴って沈めた。

霧が始めてビビがそろそろ島から出られると言った。朝が来たのか辺りが少し明るくなる。みんなの1番後ろに居たヴァルは、やっと島を出られると思ったが、背後から知らない気配がした。後ろに振り向くと、看板の2階の手摺りの上に誰かが座っている。

「もうすぐ朝ね」

「ああ、追っ手から逃げられて良かった」

「本当よねえ」

「船を岩場にぶつけないよう、気を付けないと」

「任せときなさい！」

ナミが余所者と顔を見ずに会話をしている。不思議な光景だった。ナミは段々違和感を覚えてルフィに尋ねる。

「…で、今の声アンタ？」

「んにや違うぞ？」

ナミは恐る恐る振り返って確認すると、余所者の姿を見つけた。気配を探ったが危害を加えてくる気がしない為、見てただけだったが言った方が良かったのかとヴァルは思った。

「良い船ね？」

余所者は気軽そうに船を褒める。ナミは声にならない悲鳴を上げた。

「だ、誰だ！」

「あ、アンタは…！」

ビビが驚愕しながら余所者を見る。知っている様子だった。

余所者はビビに顔を向けて笑う。

「今、そこでMr. 8に会ったわよ。ミス・ウエンスデー」

「アンタが、イガラムを…！」

「どうでも良いけど！なあんでお前はこの船に乗ったんだ！敵かお前？」

「何でアンタがこんなところに居るのよ！ミス・オールサンデー！！」

いきなりの早い展開にヴァルは着いて行けそうに無かった。知らない者の名前が出たり、ビビが怒ったり、ルフィは敵か確認したり、ヴァルの頭では状況整理が追いつかない。

ナミはビビの言葉を聞いてハツとした。

「ミス・オールサンデー？ 今度は何番のパートナーなの!!？」

「Mr. 0：ボスのパートナーよ」

「クロ、クロコダイルの☒」

「ボスの正体を知ってるのは、この女だけ。私達はコイツの後を尾行することでボスの正体を知った」

ミス・オールサンデーはビビの言葉を補足した。

「正確には、尾行させてあげたの」

「何だ、良い奴じゃん」

「そんなこと知ってるわよ！ 正体を知ったことをボスに告げたのも、アンタでしょ!!」

「正解♡」

「やっぱ悪い奴だ」

「オメーは少し黙ってろ」

ヴァルはみんなの様子からミス・オールサンデーは敵なのだと認識した。しかし一向

に敵意を向けて来ないことに疑問を抱く。

「アンタの目的は一体何なの？」

「……さあね？」

ミス・オールサンデーはみんなを一人ずつ見渡してからビビを見つめる。

「余りにも真剣だったから、つい協力しちゃったの。本気でバロック・ワークスを敵に回して国を救おうとしてる王女様が、余りにも：馬鹿馬鹿しくて」

「……ッ!!!」

ビビが怒りを堪え切れない様子で睨みつけた。ミス・オールサンデーがビビに注目している間ヴァルは密かに行動を開始する。

「舐めんじやないわよ——!!!」

みんながビビの声を合図に武器を構えた。さつきまで寝ていた筈のウソツプとサンジもミス・オールサンデーを挟んで武器を向ける。この状態でも、何処か余裕そうだった。

「そう言う物騒な物、私に向けないでくれる？」

機嫌悪そうに言った後、サンジとウソツプが手摺りを超えてみんなの方へ飛ばされた。ナミとゾロの武器も、まるで手元を叩かれたように看板に落とす。ヴァルは一人陰から見ている、みんなの体に突如手のようなものが花のように咲いた所を目撃した。で

もやはり、攻撃には武器を落とさせはしたが、敵意が含まれていない。

「悪魔の実か……!」

「イツテテ……うおつ!よく見れば綺麗なお姉さんじゃん!!」

サンジがミス・オールサンデーの顔を見て叫んだ。相変わらず時と場合を選ばない女好きの鏡だった。

「まあそう焦らないで、私は別に何の指令も受けてないの戦う理由は無いわ」

「ウオツ☒」

ルフィが被っていた麦わら帽子がミス・オールサンデーの方に飛んで行った。帽子を取って手で遊びながらルフィを見つめる。

「貴方が麦わらの船長ね?モンキー・D・ルフィ」

「お前!!帽子を返せ!!喧嘩を売ってんじゃねえかこのヤローー!!!」

ルフィは帽子を取られて激怒した。前に一度、いつも被ってる帽子はある人から預かった大事な宝物と言っていたことをヴァルは思い出した。ヴァルは段々とミス・オールサンデーに足音を立てずに接近する。ミス・オールサンデーは近づいてきているヴァルに気付く様子も無く帽子を頭に乘せた。

「不運ね。バロック・ワークスに命を狙われる王女を救った貴方達に、こんな少数海賊に護衛される王女も。でも何よりの不運は、貴方達の記録指針ログポースが示す進路。次の島の名は

…リトルガーデン」

ナミは急いで腕に着けている記録指針ログポースを確認した。ミス・オールサンデーは不適な笑みを浮かべながら見つめる。

「貴方達は私達が手を下さなくても、アラバスタに辿り着けず、全滅するわ」
「知るか!!!帽子返せ!!!」

ルフィは今にも飛び掛かろうとしていたが、その必要が無くなった。

カプツ

「…あら?」

ミス・オールサンデーが後ろを見ると、ヴァルがいつの間にか背後に移動して麦わら帽子を取った。ミス・オールサンデーは少し驚いた顔をしている。

「(この子、いつ背後に移動したの?用心はしてたのに…)」

「わぶ(ワフ)?」

ミス・オールサンデーは麦わら帽子を唾えたヴァルを見つめて動きが止まった。ヴァルも目を見て見つめ合う。みんなが見つめ合ってる2人の様子を固唾を吞んで見守った。

「……………」

「……………」

「『『『『ゴクリッ…』』』』」

暫く見つめ合うと、ミス・オールサンデーが動き出した。

「…………お手♡」

「わぶ（ワフ）」

「『『『いや、何しとんじやお前ら!!!』』』」

ミス・オールサンデーはお手をしてもらえて少し嬉しそうな顔をする。ヴァアルは手を出されて思わずルフィと初めて会った時を思い出して前足を乗せてしまった。

ゾロとナミは勝機と見てヴァアルに叫ぶ。

「ヴァアル！ソイツは敵だ！噛みつけ!!」

「おいクソマリモ!!何ヴァアルちゃんにお姉さんを攻撃させようとしてんだ!!」

「ヴァアル！貴女の力、思い知らせてやって!!」

ヴァアルは2人の声を聴きながら、ミス・オールサンデーを見ていた。ミス・オールサンデーも2人の声を聴いてヴァアルに警戒する。

スンスンツ…

ヴァアルは匂いを嗅いで少し考えると、手摺りを踏みルフィの元に戻る。ルフィに帽子を差し出した。

「お？おお！帽子！」

ルフィは帽子が戻って来ると直ぐに頭に被った。

ナミとゾロは驚愕した顔をしてヴァルを見つめる。メリー号を守った時の印象とだいぶ違っていた。

ミス・オールサンデーはヴァルを気に入ったのか不敵な笑みを納め美人らしい綺麗な笑みをしている。

「その子、可愛いわね」

「だろ？ヴァルはスゲー良い奴なんだ！お前嫌いだけど、良く分かってんじゃねえか！」
「何ヴァルが褒められて嬉しそうにしとんじやお前は!!!」

ナミとゾロがルフィの態度にムカつき怒鳴った。

ミス・オールサンデーは懐から何かを取り出してルフィに投げ渡す。

「何だこれ？」

「アラバスタの1つ前の島を記録した永久指針^{エターナルポイス}。リトルガーデンで無様に全滅されても面白くないから、あげるわ」

みんなはミス・オールサンデーを見て驚いた。先程から一体何を考えているのかが検討が付かない。ビビは永久指針^{エターナルポイス}を見て複雑そうにしていた。ミス・オールサンデーの言う通りにするのは気が進まないが、みんなを危険な目に合わせる訳にも行かない責任感がせめぎ合っている。ルフィは永久指針^{エターナルポイス}を力を込めて握り始めた。

「いるかこんなの!!」

バリントン!

「何してんのよこのおバカ!!」

「痛つて——^{!?}」

ナミがルフィを殴り飛ばした。

「アホかお前! 折角楽に行ける航路を教えてくださいじゃない! ほんとは良い奴だったらどうすんのよ!」

ルフィはナミの言葉を耳に入れずミス・オールサンデーの方を見た。ミス・オールサンデーもルフィを不思議そうに見ている。

「この船の進路を、お前が決めんなよ!」

「……そう、残念ね」

残念と言いながらも笑って楽しそうにしている。手摺りから降りて船の端に歩き始めた。

「でも、私は威勢の良い奴は嫌いじゃないわ。生きてたら、また会いましょう?」

「イヤ!」

ルフィの言葉に笑うと、船の外に飛び降りた。外には何か待機している。みんなは揃って船の外を見た。

「な、何だありや?」

「まさか、海王類……? つて、ああ!」

「「「オオオオオオ亀だああ!!」」」

ミス・オールサンデーは船ぐらいの大きさの亀に乗って去って行った。ビビはミス・オールサンデーが去って漸く落ち着いたのか看板に膝を着く。

「あの女……! 一体何を考えているのかサツパリ解らない……」

「だったら、考えただけ無駄ね」

「そういう奴はここにも居るぞ」

ゾロとナミがルフィを指差しビビを慰めた。ウソップとサンジは状況に追いついていない。

「いい加減、状況を教えてくれ——!!!」

ルフィとヴァルはミス・オールサンデーの去った方向を眺めていた。ルフィはヴァルに質問する。

「なあヴァル、何でアイツにお手したんだ? 敵だぞ? アイツ」

「……………」

ルフィに聞かれたヴァルは自分でも良く分からなかった。ただ、どこかでヴァルはミス・オールサンデーを自分と重ねている部分があり、それが原因だと思った。

「まあ別に良いけどよ」

ルフィは質問を止めた。ヴァルが少し悩んだことを察したようだった。

みんなの方に行こうとしたルフィだったが、1つ重要なことを思い出した。

「あ、ああ？ああああああ!!!」

「いきなり叫んでどうしたルフィ!!」

ゾロがルフィに聞いた。ルフィは顔に冷や汗を流しながら目元をピクピクさせる。

「ヴァルの分の肉、忘れてたああ!」

「!!!……ああああああ!!!」

みんなも思い出したのか叫ぶ。確かウイスキーピークの港に着いた時にメリー号でお留守番するヴァルに肉を持つてくることを全員忘れていた。ナミは大至急サンジに命令を下す。

「サンジ君!今すぐ何か作って!」

「合点ナミさん!」

「ゾロ!アンタは足りなくなつた時の為に近くに居る魚でも潜って捕まえて!ロープで体は巻き付けて置くから!」

「しょうがねえなあ!」

「ウソツプとルフィは釣り!!」

「おうー！」

ビビは急な展開に追い付け無いまま狼狽える。ナミはビビを見て言った。

「ビビは何もしなくて良いわ」

「え？でも…」

「これは私達がヴァルにした約束を破っちゃったからしてるだけ！だからお願い！何も

しないです！」

「あ、…はい」

各自ヴァルとの約束を守れなかった償いを始める。ビビはヴァルとの間に1つスペースを空けて隣に移動した。みんなが船で走り回ってる中、看板の中央に居る事に居心地が悪かったからだ。

ヴァルとビビは焦りを隠せない様子みんなの表情を見ながら暫く眺めていた。

幼女、王女を群れ（仲間）に迎える

船が騒がしくなって1時間程立った。キッチンの食卓にはみんなが集めた食材をサ
ンジが美味しく作った料理達が並んでいる。料理の数が多過ぎて机が見えなくなる程
だ。

グウ~~~~~

ヴァルのお腹が音を鳴らす。見てるだけで涎が出てしまいそうで早く食べたいが、ま
だ狼の姿で居た。ナミはビビをヴァルの目の前に連れて来て紹介する。

「ヴァル、この子はビビって言うの。アラバスタ王国の王女様で…あ、ヴァルには難しい
わよね？簡単に言うならアラバスタ王国はヴァルの居たような島、王女は島の1番偉い
人の子供って事。ごめんね？説明遅くなって」

「は、初めまして…では無いけど、その、これからよろしくお願いします」

ジー…

「あ、あのお…？」

ジー…

「[[[[[ものすつごく見とる…]]]]」

「(凄く見られてる…これってもしかして、警戒されてる☒)」

ビビはヴァルの反応無しに凝視されて心配になり誤解をしている。別にヴァルはナミから説明を受けたので警戒心を抱いてはいない。しかし、群れに突如入って来た新人なので、まず外見と顔の表情からどんな人間かを確認しているだけだった。

ヴァルは見た目の確認が終わって、次のステップに入る。突然立ち上がったヴァルにビビは驚いて体をびくつかせたが、恐怖で動けなかった。

スンスンツ…

「ヒィ…！」

「怖がらなくても大丈夫だよビビちゃん。ヴァルちゃん、匂い嗅いでるだけだから」

「おう、狼の習性って奴だ。そのままジツとしてろ」

ヴァルはビビから出てる恐怖の感情を感じ取りながら全身の匂いを嗅ぐ。

匂いは普通だったが、何故か渴いた砂のような感じがした。暫く嗅ぎ続けてビビから離れる。結論を言うと、危険人物では無いとヴァルは判断した。

「ヴァルちゃん、もう良いのかい？」

「ワン！」

「(…、怖かったあ…！)」

ビビは緊張と恐怖から解放されてホッと息を吐いた。

ヴァルは思う存分確認する事でやっと気を緩める。狼の姿から元の姿に戻った。ビビは目を丸くしてヴァルを見る。

「…え？女の子？」

ヴァルはウイスキーピークで飲まず食わずだったので流石に空腹が限界まで来た。驚いてるビビを気にせず、椅子に座って机に着き料理を食べ始める。

「まぐまぐ…」

空腹は最高のスパイスと何処かで聞いた事があるが、まさにその通りだった。ヴァルは夢中になって食べ進める。

一方のビビはヴァルが女の子の上、能力者であった事に驚きを隠せない。

「この子、能力者だったの☒」

「ええそうよ、名前はヴァル。気を許したら結構優しいから、心配しなくて良いわよ」

ナミはヴァルの頭を撫でながらビビにヴァルを紹介した。ヴァルは口元を派手に汚して料理を食って行く。ルフィは料理を見て涎を滝のように流す。

「美味そ〜」

「お前はウイスキーピークでたらふく食ってたら!!」

「だってー…」

ルフィが食べた物達は既に消化済みだった。有名な大食い女王も驚愕ものである。

ヴァルはルフィの方へ料理が乗ったお皿を何皿か近づけた。ルフィはヴァルに向けてキラキラと目を輝かせる。

「良いのか!?? ありがたいがとうなヴァル!!」

「クウ……ヴァルちゃん、なんて良い子なんだ!」

料理を勢い良く食べ始めるルフィを見ながら続きを食べるヴァルを見てサンジが目を拭う。ナミはルフィに呆れた視線を向ける。幼女に飯を恵んで貰うとは恥ずかしく無いのだろうか。いや、ルフィにそんな恥ずかしさなどある筈が無かった。

「うんめ〜!」

「ん? ヴァルもう良いのか? まだスゲー量があるぞ?」

ヴァルが料理を食べなくなったのを見てウソップが言った。ヴァルは頷き、半分程残った料理を全てルフィの方へ寄せる。狼の群れではリーダーから獲物を食う権利があるが、ヴァルも無意識の内に本能でリーダーであるルフィに料理を明け渡していた。ルフィはますます嬉しそうに食べ進めて行った。

ヴァルはサンジの方へ行き足元に抱き着いた。美味しい料理を作ってくれたお礼をボディランゲージで表す。サンジはデレデレしながらヴァルの頭を撫でた。撫でられて直ぐ、ウソップやゾロ、ナミにも抱き着いてお礼をする。サンジはゾロが抱き着いたヴァルを抱き上げたのを見て殺意が湧いたが、ヴァルの前なので下唇を噛みながら蹴り

掛かるのを我慢した。

お腹を満たした後はお風呂の時間になった。ナミはヴァルの頭を洗っている。能力者は水で満たされているお風呂が苦手な人も多いらしいが、ヴァルは好きなようだった。

お湯で満たされた浴槽にはビビが入っている。ビビは大人しく頭を洗われているヴァルを見て少し前の事を考えていた。

「双子岬の時は吹き飛ばされ、ウイスキーピークの港では賞金稼ぎ達を一人で抑え込んでいたし……。この子、幼い子供とは思えないほど、凄い強さを内に秘めてたのね」

「ビビ？ どうしたの？」

「な、何でも無いわ」

「ふーん？」

自己紹介が終わったが、ビビは何処かヴァルを怖がっているように感じられる。ナミは少し考ええるとヴァルの顔を覗き込んで言った。

「ヴァル、次はビビに頭洗って貰いましょうねー」

「え××」

「コクツ」

「ほら、こつち来て」

ビビはあたふたと断ろうとしたが、ナミとヴアルの視線に負けて湯舟から出る。ヴアルの後ろに行き髪に手を入れるとビビが目を見開いた。

ヴアルの髪はナミが毎日洗ってケアをしている為、島に居た時に比べ、光沢が増している。更に触ればサラサラと流れる感触を残す程に滑らかな髪質に仕上がっている。水で濡れていても一切手に引つかかる事が無かった。

ビビはヴアルの髪に魅せられて暫く触り続ける。

「なんて綺麗な髪なの？こんなの見た事が無い…」

「ふふくん、でしょ？ヴアルの髪の毛は本当に綺麗なのよね〜♪」
「？」

ナミも参加してビビと一緒に髪を触り始めた。ヴアルは触られるのが嫌いでは無いので、2人の好きなようにさせる事にした。

ヴアルの頭を洗ってからのビビの態度は一変して、ヴアルを抱っこして湯舟に浸かるまでになった。元々適応能力が高いのか、一度恐怖心を無くせばビビもヴアルと言う名の沼に嵌ってしまった。ヴアルはウイスキーピークに上陸・脱出してから一度も寝ていない為、睡魔が限界に近づきポケーとした顔をしている。

ヴアルが眠たそうにしている事をナミは察知して、寝る前にウイスキーピークで借りパク（窃盗）した物をヴアルに着せた。

「私の服卒業ね、結構似合ってるじゃない！」

「可愛い!!」

そこには、ノースリーブでフードが付いた黒い上着、ショートパンツの青いジーンズを着たヴァルが居た。いつものぶかぶかで大きかったナミの服に慣れていた為、自分にピッタリのサイズに少しだけ落ち着かない。ナミとビビがキラキラした目でヴァルを見る。ナミは明日からこの服を着せる事に決めた。ヴァルにもう良いわよと伝えると、ヴァルは服を全て脱ぐ。というか全裸になった。

「……全裸☒」

「やっぱり寝る時はそれが良いのね……」

野生で生きていた名残なのかは分からないが、ヴァルは寝る時に必ず全裸になって寝る事に拘った。ナミも何度か直そうとしたが、どうにもこれだけは譲れないのか言う事を聞かない為、諦める事にしていた。

真夜中になってヴァルは目を開けた。耳が無意識の内に音を拾って眠りから覚めた。

ビビの方から何やら音がする。見てみると、ビビは目を瞑って寝ているが体が震えている。気になってビビの顔を覗き込むと、ビビの目から涙が出ていた。泣きながら何かを呟いている。ヴァルは涙を見つめたまま、ビビの目元を布団で拭いた。

ビビが涙を流していると、何だかムカムカしたものが胸に込み上げてくる。
「ヴァル」

ナミがヴァルの名前を呼んだ。ヴァルが起き上がった振動で目が覚めたらしい。ナミが手でおいででのジェスチャーをするのでヴァルは側に寄った。

「ビビは今、凄く傷付いてるの。だからそつとしてあげて」

ヴァルはもう一度ビビの方を見た。血の匂いはしないので、怪我をしたとはどう言う事なのだろうと思った。

ナミはヴァルを連れて外に出る。上を見ると綺麗な夜空が広がっていた。

「ヴァルにはまだ難しい事かも知れないけど、聞いてくれる？」

「コクツ」

ヴァルはナミの隣に立ち、手摺りの上に腰掛けた。ナミは手摺りに肘を付いてヴァルに話し始める。

ビビはアラバスタ王国の王女だが、ある組織から命を狙われて国から逃げて組織に潜入し独自に調査をして来た。でも、ウイスキーピークでの騒動の中、みんなに組織のボスの名前を漏らしてしまい、それが組織にばれてしまった。昨日上陸した時に会ったイガラツポイ（本名イガラム）はビビに昔から仕えている人で、自分が囹になつてビビとみんなを逃がしてくれたのだが、直ぐに船が攻撃されてしまった。

ナミは暗い顔をしながらゆっくりとヴアルが分かるように説明する。

「私はビビの国を助けてあげたい。何でビビがあんな思いをしなきゃいけないのよ、ふざけてる」

ナミは菌を食いしぼりながら目を尖らせた。ナミも故郷であるココヤシ村をアールンが率いる魚人海賊団に支配され実の親同然だったベルメールを殺害された幼少期を経験している為、怒りが込み上がって仕方なかった。

ヴアルはそんなナミの顔を見ていた。ナミから怒りの感情が溢れ上がって体の外に漏れている気配を感じる。ナミの顔を見ながら、先程のビビが頭に浮かんだ。泣きながら呟いていた言葉が耳の中に反響している。

『イガラム……めんなさい……！』

「……………」

バキバキバキ！

「ヴアル☒」

ナミがヴアルのを見ると、手摺りに手を付いていた部分を小さな手で握り潰していた。ヴアルはよく分からないが、つい力を入れ過ぎて手摺りを壊してしまった。メリー号に對して申し訳ない感情が湧きながら、頭は酷く極寒のように冷え、胸は火山が噴火したように熱く煮えたぎっている。

ヴァルはこの日、麦わら海賊団と出会ってから初めて、表情は変わらないが、目を真っ赤に染めた本気の怒りの感情を露わにした。

幼女、リトルガーデンに辿り着く

朝になり、良い天候に恵まれた一味はリトルガーデンへ向けて進路を進めていた。

「あつ、また風が止まった」

しかし、流石は偉大なる航路^{グランドライン}。そう簡単には進ませてくれる筈が無く、時折風が吹かなくなったりして船が思うように進まない。

「リトルガーデンへ向けてまっしぐらって行きたいのに…また一時休止だわ」

ビビはメリー号の帆を見上げて顔を曇らせる。故郷が心配でならない様だ。

「こうしてる間にも…時間が…」

「焦らないで。一刻も早くアラバスタに行かなきゃならないのは、分かってるけど…」

ナミとビビが重苦しい空気を出している中、

「よし、釣りするぞ釣り〜！」

「クワツッ！」

「おい誰か餌知らねえか？」

「餌？ああそれ俺食ったぞ。うまかった」

「いや食うなよ!?？」

「どうすんだよ餌食つちまって！魚取れねえぞ！」

「…コイツ」

「おう、いけるな」

「クエツ」

「捕まえるー！」

「うるせえぞでめーら！ぶん殴るぞ！」

一味の船長を筆頭としたバカ共は本日もやかましく元気であった。

「アンタ達の場合…：少しは、焦らんかああ!!」

ナミが手摺りを叩いて叫ぶ。

「何だよお前そんなに」

「怒ってるナミさんも素敵だあ」

はあ…とナミは溜息をついた。焦りは禁物という言葉があるが焦りが無さすぎるのも考えものだ。

ギイイイ…

「ヴァルおはよう、よく眠れた？」

「おはようヴァル」

「コクツ」

ナミとビビから挨拶を貰ったヴァルは動作で返す。ヴァルはウイスキーピークで眠らず船番をしたこととミス・オールサンデーの登場でかなりの時間一睡もしていなかった。流石の野生児のヴァルでさえも不眠から来る睡魔に勝てず、今の今まで女子部屋でタオルケットに包まり眠っていた。

「おーい！島見えたぞ〜！しーま、しーま♪」

全員が船首の方にいるルフイを見る。ルフイのその先、まだ着くまで時間がかかるであろう木々で生い茂った無人島があった。ナミは記録指針ログポイントと島を見比べながら確信した。

「間違いない、磁気が引き合ってる。あの女が言う通りなら…あの島がリトルガーデンよ」

リトルガーデンを見つけたから暫く経ち、メリー号を島の陸地近くまで接近させた。

「ここがリトルガーデンかあ」

「どのへんがリトルなんだ？」

「そんな可愛らしい場所には見えないけど」

遠くから見た時は分からなかったが、木の一本一本がメリー号の十隻分は超える高さだった。島の名前はリトルでも、実際は訪れたこちらの方がリトルの様な気がしてならない。

「でも気をつけないと。ミス・オールサンデーの言ったことが気になるわ」

『でも何よりの不運は、貴方達の記録指針ログポイントが示す進路。次の島の名は：リトルガーデン』
『貴方達は私達が手を下さなくても、アラバスタに辿り着けず、全滅するわ』

みんなの脳裏にミス・オールサンデーの言葉が浮かび上がる。ウソップは恐怖のあまり震えていた。

「なあ！上陸せずに次の目的地まで向かおうぜな」

「でもすぐにログは貯まらないわ」

「それにそろそろ食糧も尽きちまうしな。この前の町じや何も蓄えてねえ」

毎度恒例ウソップの主張は一味に届かなかった。不憫に思ったヴァルに背中を叩かれて慰められたウソップの目尻は日差しのせいも光って見えた。

「おい、あそこに河口が見えるぞー！」

「**本**」

ゾロが指を刺した先には海と川が合流する河口があった。河口から先は島の中の川へと続いている。

河口から川に入ると木々で日差しが遮られて少し辺りが暗くなった。不気味な雰囲気
気が漂っている。

ヴアルはメリー号から陸地に生えている草木を見ていた。ヴアルが住んでいた無人
島では見たことも無いものがわんさか生えている。また、元いた無人島と打って変わり
少し気温が暑く感じる。加えて生き物の匂いや鳴き声が特に特徴的だった。どこかそ
こら辺にいる生き物とは違うような気がしてならない。新しいことが多すぎてたまら
なくなつた。

オギャー！！ギイイヤー！！

「キヤア!!」

ナミが鳴き声に驚いた。それを見たサンジが鼻の下を伸ばす。

「かつわいい♡」

ウソツプがサンジの声に反応して少女漫画のように加工したキラキラおめめを向け
た。

「ん？俺か？」

「オメーじゃねーよ！ナミさんに決まってるんだろ！」

グルルル…

陸地から唸り声が聴こえてきて茂みの中からトラが現れた。トラが現れるのはいい

のだが、肝心の大きさが通常よりも大き過ぎた。メリー号の5分の1にも迫る大きさだった。大きさよりも、ヴァルはトラが全身血塗れで瀕死の状態なことが一番気になった。トラは捕食目的でこつちを狙っていると思われているが、ヴァルはトラが生き残りたい一心でこつちを警戒している意識を感じ取った。段々と脚の力が抜けていき、突如目の前で血を吐きながら息倒れた。怪我に耐え切れなかつたようだ。

ナミは記録指針ログポースが貯まることも関係無しにこの島が危険過ぎると理解した。

「なんで…なんで…、なんでジャングルの王者のトラが！血塗れで倒れるの☒この島やバいわ。みんなさつさとこの島出「ニヒヒヒヒ！サンジ弁当、冒険の匂いがする！」ちよ、ちよつと待つてよ！どこ行くつもり☒」

「冒険！一緒に来るか？」

ルフィは島を探検する気満々だった。ナミはこの島に暫く滞在することが確定して進路を誤つたと後悔した。